# 旧制中学校における立山登山の歴史

高木三郎*

## はじめに

筆者は、昨年本書において、富山県内の小中学校における立山登山の歴史を考察した。本稿ではその続編として、富山県内の旧制中学校における立山登山の歴史を考察する。多くの旧制中学校では「校友会誌」が毎年発行されて、様々な活動記録が記されている。そのなかに、登山記録も多く掲載されている。明治及び大正初期には、個人的な登山旅行記が掲載されているが、のちには教諭引率による登山が行われるようになり、生徒の手によって詳細にしかも感想を交えて記録されるようになった。それらの手記の分析によって、旧制中学校における学校登山の実態を明らかにして、そのなかにおける立山登山の意義を考えてみたい。

ところで、旧制中学校における登山を考える場合、同好者によるクラブ的な登山も盛んであり、学校行事としての登山との区別がつきにくいという問題がある。この問題に関しては、橋本勲同志社女子大学教授による先行研究がある。橋本氏は、『我が国における野外教育の歴史についての研究―（第１報）野外教育の見地から見た学校登山について―』[1]と題する論文で、「学校教育の一環として実践される全ての登山活動を学校登山と定義しておきたい。それ故に学校登山は学校行事の一つとして行われる登山と山岳部あるいは登山部等のクラブ組織による課外活動の一つとして行われる登山を包含し、スポーツ登山の両極端にまたがっている。…狭義には、学校行事として行われる登山のみを示す。」と、学校登山を定義している。そして、明治後期から登山が学校教育の中に入ってきた過程として、「第一には学者、教師、学生の研究あるいは学生、生徒の校外教授として、第二には夏期休暇の有効な利用法として登山が行われるようになった」とし、「登山は遠足や旅行のもつ教育的価値を受け継いでくる」と指摘している。ところが、「大正期になるとスポーツとしての登山という要素が大きくなり始め」、「発足した時は学校行事的性格をもっていたものが、名称が改められると共に登山、旅行に興味をもった者の集ったクラブとしての性格が強くなっていったようである」とも述べている。本稿では、橋本氏の定義を採用して、富山県の旧制中学校の場合どのような特徴が見られるのかを明らかにしてみたい。

検討する学校としては、校友会誌の資料が豊富に確認できる富山中学校・魚津中学校・砺波中学校を主に取り上げる。高岡中学校については、同校の泉治夫教諭が『高岡中学・高岡高校百年史』[2]で詳述していることもあり、ここでは簡単にふれるにとどめたい。

富山県では、立山に登って一人前と見なす風習が古くからあったといわれている。立山登山は、地域が主体となって青年に対して行う重要な教育的行事であった。近代以降、学校教育制度が整備され、学校が青年の教育を担うようになると、立山登山の有り様も当然変わらざるを得ない。学校による立山登山は、戦後いっそう広まり、多くの富山県人が経験していることである。その出発点を見直してみることも意義のあることではないだろうか。

*富山県[立山博物館]

# 1　富山中学校における学校登山

## 1.1　学校登山の開始

### 1.1.1　初めての学校登山

富山中学校は、明治18年、富山県で最初の中学校として開校した。立山を間近に見る場所に立ってい

富山中学校は、明治18年、富山県で最初の中学校として開校した。立山を間近に見る場所に立っていることもあって、学校登山が始まる以前から、登山趣味が広まっていたようである。近代登山の先駆者的存在として知られる小杉復堂は、明治33年から明治45年の間、富山中学校に在籍して、生徒に漢文を教えるかたわら登山を続け、その登山記を同校校友会誌『文武会報』に掲載している[3]。また、『文武会報』には、明治38年以降、生徒の個人的な登山記も多く掲載されている[4]。このように登山趣味を鼓舞するような雰囲気のなかで、県内で最初に学校行事として登山が行われることになった。

富山中学校の学校登山は、大正４年に始まる。大正４年12月発行の『文武会報27号』には「立山登山隊―陸上競技部」という見出しで写真が掲載されているだけで、詳細は不明である。しかし、この年の４月に文武会規約が改正され、文武会組織の中に陸上運動部が新設されて、「運動会徒歩練習遠足登山等ニ関スル事項ヲ掌ル」こととなって、この年から陸上競技部の中に登山活動が組み込まれることになった[5]。またこの年から、陸上競技部は文武会会計から登山等の名目で支出を認められている[6]ことからも、積極的に登山活動を行うようになったと考えられる。

また、この大正４年の立山登山について、当時の新聞に次のような記事が載っている。富山中学校からの各運動部の紹介記事の中で、「最後に今一つ殊書すべきは今年より陸上運動部にては新しき試登山（ママ）である。今年は最初として地方人の最も崇拝厚き立山を選んだ。募集の始め三十名の予定に百五名の多きに達した。此の一時如何によく我校の元気を現したる事よ」[7]とある。他の新聞にも、「八月五日樋口山田平井三教諭監督の下に立山登山隊三十名」[8]とある。一方、『文武会報27号』に掲載された写真には、黒い服を着た教師らしき人物３名と生徒24名が写っている。このようなことから、富山中学校では、大正４年から学校登山が行われ、その第１回が立山登山であったことと、教師３名の引率で、全校生徒から参加者を募集した結果、30名近くの生徒が参加したと言っていいだろう。また、約百名の希望者がいたということで、立山登山へのあこがれが強かったことが窺える。

### 1.1.2　当時の部活動

ところで、大正４年に文武会規約が改正された理由として、『百年史』では次のように指摘している。すなわち、明治41年に対抗試合の自粛の指導が文部省より出されて以来、富山県内では学校対抗の各種大会が自粛されていた。ところが、大正２年、富山中学校が野球の対外試合に参加しないことを新聞で批判されたことをきっかけとして、対外試合禁止が解かれることになった。この対外試合の解禁に合わせて大正４年４月、文武会規約が改正され、この年から積極的にスポーツを奨励し、校内大会を開くとともに対外試合にも積極的に参加するようになった[9]。このようにスポーツが奨励されるようになって、登山も計画されることになったのである。このような動きは全国的な傾向でもあった[10]。

また当時は、「文武会が主催する行事は学校行事でもあり、文武会各部はその学校行事でもあるそれぞれの大会や小会を主催することが任務であった。それ故、各部には部長（校長が教師から任命）・理事（委員の中で互選）・委員（各組より選挙で選出）の役員がいて、各部にかかわる行事を行ったが、部員がいないのが普通であった。全校生徒は文武会員として各部が行う行事のすべてに参加することが建

て前であった」[11]。それゆえ、大正４年に作られた陸上競技部も、運動会・遠足・登山などを主催するもので、現在のような陸上競技部でなかった。

しかし、各種大会が増え、他校との試合が多くなり、高い技術が要求されるようになれば、平素からその競技を練習しなければならないようになっていった。こうして、文武会の各部は、同好者を中心に選手制をとる現在の部活動的なものになっていった。入部の任意化を通して、運動は楽しみであるという「文化的自由主義」の気分が形成されていった[12]。一方、対外試合がないような部では、従来のように校内で大会や行事を主催することが続いた。その典型が、登山であろう。他の学校でも見られることであるが、登山については、後々まで全校生徒から参加を募ることが続いた。しかしやがて、同好者が集まってより困難な登山を目指す動きもでてきて、現在の部活動につながっていく。

## １.２　学校登山の展開

### １.２.１　初期の学校登山

富山中学校では、大正４年から毎年、登山が実施された。概要は（第１表）の通りで、大正６年には立山と富士山、大正７年には立山と富士山と白馬岳、大正12年には立山と白山の登山隊が編成された以外は、昭和初年まで立山登山だけがほとんど毎年、７月下旬から８月上旬に行われた。

大正７年の３つの登山については、「費用は総額で立山登山は97円６銭、富士登山は110円42銭、白馬登山は71円52銭かかっているが、生徒１人当たり、立山で２円、富士で11円98銭、白馬で10円徴収し、残りは文武会より支出している。」[13]。また、大正６年の富士登山のときには、校長の見送りを受けている。大正７年の白馬登山のときには、何人かの先生に見送られて学校から出発している。このようなことからも、これらの登山が全く個人的なものではなかったことがわかる。

しかし、立山以外の登山は継続しなかった。その理由としては、経費がかかりすぎることと、引率を引き受ける先生が見つけにくかったことが考えられる。大正６年の富士登山と大正７年の白馬登山は、どちらも樋口教諭が引率している。樋口は、大正４年の第１回立山登山でも引率している人物である。樋口が引率を引き受けることで、これらの登山が可能となったのであろう。また、大正12年の白山登山は、太田教諭が引率している。太田は、大正９年から継続して立山登山の引率者となっていることから、山好きな人物だと思われる。このように、立山以外の登山は、山好きで引率を引き受ける先生の好意で行われており、そのような先生がいなければ計画されない性質のものであったといえよう。

一方、立山登山は、基本的に３年生以上から希望者を募って、継続して実施された。大正９年の約50名が最多で、大正時代は少なくとも30名近くの生徒が参加している。昭和に入ると参加生徒が減少しているが、参加したくても不況による経済的困難で参加できない生徒も多かったと思われる。引率教諭は（表１）のとおりで、多くの教諭が入れ替わりで引率している。また、出発の見送りや出迎えには、保護者だけでなく、校長を始め多くの教諭が来ている。最後には、校長または他の教諭が訓辞を述べ、富山中学校登山隊の万歳をして解散している（表２参照のこと）。そのうえ、文武会報に詳しい手記が毎年掲載されていることからも、重要な学校行事として位置づけられていたことがわかる。

登山の目的については、大正１１年度の富山県教育委員会の調査報告によれば、「心身の鍛練及び博物地理理化学の知識獲得」となっている[14]。生徒たちは、やがてこの目的をこえて、登山を楽しむようになっていく。

### １.２.２　学校登山の多彩化

昭和７年の文武会機構改革で、山岳部として独立しスキーを含む独自の活動を行えるようになり、このころからレベルの高い登山が行われるようになっ

第１表　富山中学校の登山記録一覧

| 時代 | 掲載文献 | 参加生徒 | 引率教諭 | 日程 | 行程 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正4年 | 27号(大4.12.12) | 30名(タイムス7.29) | 樋口、山田、平井(タイムス) | 8.5～(タイムス) | 不明 |
| 大正5年 | 28号(大5,12.26)「立嶽踏破日記」 | 人数不明 | 田中、橋本 | 8.2～8.6(4泊5日) | 学校発(徒歩)→芦峅(泊)。材木坂→一の谷→室堂(地獄谷見学、泊)。浄土山→雄山(快晴)→室堂→松尾峠→立山温泉(泊)。芦峅寺→大岩山(泊)。五百石→日置(解散) |
| 大正6年 | 29号(大6.12.26)「立嶽登攀の記」 | 30名 | 竹島、茶谷 | 7.27～7.30(3泊4日) | 学校発(徒歩)→芦峅寺(泊)。材木坂→一ノ谷→室堂(地獄谷見学、泊)。浄土山→雄山(快晴)→室堂→松尾坂→立山温泉(泊)。岩峅寺(解散) |
| 大正6年 | 29号(大6.12.26)「富士登りの記」 | 8名、卒4名 | 樋口、赤間 | 7.26～7.29(3泊4日) | 富山駅発(汽車)→24時吉田(泊)。富士山頂→8合目石室(泊)。(御来迎)→須走→御殿場→半名古屋(泊)。帰富。 |
| 大正7年 | 30号(大7.12.26)「白馬登山の記」 | 4名、卒1名 | 樋口 | 8.2～8.7(5泊6日) | 学校発(徒歩)→立山温泉泊。ザラ→五色一黒部河畔平(野営)。針ノ木峠→大町對山館(泊)。四ツ屋→白馬尻小屋(泊)。白馬登頂→蓮華温泉(泊)。帰富。 |
| 大正7年 | 30号(大7.12.26)「立山から」 | 30余名、他3名 | 山本、澤木 | 8.2～8.5(3泊4日) | 学校発(徒歩)→芦峅寺(泊)。材木坂→一の谷→室堂(地獄谷見学、泊)。雄山(晴)→室堂→松尾坂→立山温泉(泊)。上滝(解散) |
| 大正7年 | 30号(大7.12.26)「富士登り」 | 8名 | 今村 | 4日間＋α | 富山駅発(車中泊)→吉田着(泊)。富士山頂一8合目石室(泊)。下山、吉田→大月駅(解散) |
| 大正8年 | 31号(大8.12.3)「立山登山記」 | 35名 | 原田、近藤 | 8.4～8.8(4泊5日) | 学校発(徒歩)→芦峅寺(泊)。材木坂→(風雨のため)松尾坂→立山温泉(泊)。松尾坂→一の谷→室堂(地獄谷見学、泊)。浄土山→雄山(快晴)→室堂→材木坂→芦峅(泊)。上滝(解散) |
| 大正9年 | 32号(大9.12.20)「立山まいり」 | 約50名 | 太田、紺井、水島 | 7.25～7.28(3泊4日) | 学校発(徒歩)→芦峅寺(泊)。材木坂→一の谷→室堂(泊)。雄山(晴)→室堂→地獄谷→松尾坂→16時温泉(泊)。上滝(解散)。 |
| 大正10年 | 33号(大10.12.23)「日誌」 | 39名 | 教諭4名 | 7.25～29(4泊5日) | |
| 大正11年 | 34号(大11.12.16)「立嶽登攀記」 | 約30名 | 太田、陽、飯田、北川 | 7.25～7.28(3泊4日) | 南富山駅発→横江着(徒歩)→藤橋(称名川遡行、泊)。材木坂→一の谷→室堂(泊)。雄山(雨)→室堂→地獄谷→松尾坂→立山温泉(泊)。横江(鉄道)→南富山 |
| 大正12年 | 35号(大12.12.20)「MOUNTAINEERING」 | 20余名 | 太田、菊池、茂住 | 7.26～7.29(3泊4日) | 南富山駅発→千垣(徒歩)→藤橋着(称名見物、泊)。材木坂→一の谷→室堂(泊)。雄山(晴)→浄土山→室堂→地獄谷→立山温泉(泊)。千垣(鉄道)。 |
| 大正12年 | 35号(大12.12.20)「白山登攀記」 | 不明 | O、K先生、他数名 | 8.10～8.13(3泊4日) | 富山駅発→城端駅(徒歩)→西赤尾(旅館泊)。平瀬(旅館泊)。大白川遡行→白山室堂(泊)。白山→白峰村→桑島→鶴来→富山。 |
| 大正13年 | 37号(大13.12.10)「立山登山記」 | 30余名 | 山本、島、荘田 | 7.25～7.28(3泊4日) | 南富山駅発→千垣(徒歩)→藤橋ホテル(称名滝見学、泊)。材木坂→一の谷→室堂(地獄谷見学、泊)。雄山(快晴)→松尾峠→立山温泉(泊)。千垣(鉄道)。 |
| 大正14年 | 38号(大14.12.10)「陸上運動部報:立山登山」 | 約30名 | ? | 7.25～28(3泊4日) | 南富山駅発→千垣(徒歩)→称名滝→弘法茶屋(泊)。一の谷→室堂(地獄谷見学、泊)。雄山(風雨)→五色→立山温泉(泊)。帰郷。 |
| 大正15年 | 40号(大15.12.15)「立山登山記」 | 35名 | 飯田、その他数名 | 7.26～29(3泊4日) | 南富山駅発→千垣(徒歩)→称名滝→弘法茶屋(泊)。一の谷→室堂(泊)。雄山→(雨のため五色行変更し松尾峠)→立山温泉(泊)。帰郷 |
| 昭和2年 | 42号(昭2.12.5)「立山登山」 | 約20名 | ? | 8.2～(3泊4日) | 富山駅発→千垣(徒歩)→称名滝→弘法茶屋(泊)。一の谷→地獄谷→室堂(泊)。雄山(晴)→室堂(新道)→立山温泉(泊)。千垣(鉄道) |
| 昭和3年 | 44号(昭3.12.21)「陸上部:霊峰立山登山記」 | 約30名(日報8.9) | ? | 8.15～ | 南富山駅発→千垣(徒歩)→立山温泉(泊)。ザラ峠→五色→浄土→室堂(泊)。雄山(快晴)→別山→地獄谷→一の谷→弘法茶屋(泊)。称名滝→千垣(鉄道) |
| 昭和4年 | 46号(昭5.3.3)「立山登山記」 | 20余名 | 井城、前田、茂住 | 7.26～7.29(3泊4日) | 南富山駅発→千垣(徒歩)→称名滝→弘法茶屋(泊)。一の谷→室堂(泊)。雄山(晴)→浄土山→立山温泉(泊)。帰郷。 |
| 昭和5年 | 48号(昭5.12.25)「立山登山記」 | 20余名 | 正田、若林、茂住 | 7.26～7.29(3泊4日) | 南富山駅発→千垣(徒歩)→称名滝→弘法茶屋(泊)。一の谷→(雨)室堂(泊)。雄山(快晴)→五色→立山温泉(泊)。帰郷。 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 昭和6年 | 50号(昭6.12.25)「立山登山記」 | 15名、卒数名 | 校長、竹林、吉田、沖田、北川 | 8.2～8.5(3泊4日) | 南富山駅発→千垣(徒歩)→称名滝→弘法小屋(泊)。一ノ谷→室堂→地獄谷→剱小屋(泊)。別山→雄山(快晴)→五色ヶ原→立山温泉(泊)。帰富。 |
| 昭和7年 | 52号(昭7.12.24)「立山登山記」 | 17名 | 校長、若林、茂住、清水 | 8.2～8.5(3泊4日) | 南富山駅発→千垣(徒歩)→称名滝→弘法茶屋(泊)。一の谷→室堂(泊)。雄山(快晴)→五色ヶ原→温泉(泊)。帰富。 |
| 昭和8年 | 53号(昭8.12.25)「立山剱登山記」 | 15名、卒1名 | 校長、曽根原、柚木、石坂、館野 | 7.28～8.2(5泊6日) | 南富山駅発→千垣(徒歩)→称名滝→追分小屋(泊)。一の谷→室堂→雄山山頂(晴)→別山→剱御前小屋(泊)。長次郎雪渓→剱登頂一剱澤小屋(泊)。真砂澤小屋→池ノ平小屋(泊)。坊主小屋→猿飛(トロッコ)→鐘釣温泉(泊)。鐘釣(トロッコ)→宇奈月→富山。 |
| 昭和9年 | 54号(昭9.12.24)「立山登山記」 | 8名、卒1名 | 室岡、荒川、中村、高井、高木、曽根原 | 7.31～8.2(2泊3日) | 南富山駅発→千垣(軌道)→藤橋(徒歩)→称名滝→室堂(泊)。雄山(濃霧)→室堂(予定の道破壊のためコース変更)→松尾峠→立山温泉(泊)。帰富。 |
| 昭和10年 | 55号(昭10.12.27)「山岳部」 | 8名 | 塩谷、酒井 | 7.26～8.1(6泊7日) | 千垣(軌道)→藤橋(徒歩)→立山温泉→五色小屋(泊)。平→針の木小屋(泊)。針ノ木→種池小屋(泊)。鹿島槍→八峯キレット小屋(泊)。大黒岳→唐松小屋(泊)。白馬頂上小屋(泊)。白馬鑓岳→祖母谷→猿飛→宇奈月→富山着。 |
| 昭和11年 | 56号(昭11.12.20)「立山登山記(1班)」 | 21名 | 石坂、秋澤、藤野 | 7.27～7.30(3泊4日) | 千垣(軌道)→藤橋(徒歩)→称名滝→天狗小屋(泊)。浄土山→雄山(快晴)→別山→地獄谷→室堂(泊)。松尾峠→立山温泉(泊)。千垣(汽車) |
| 昭和11年 | 56号(昭11.12.20)「立山登山記(2班」 | 12名 | 高田、坪田、酒井 | 7.27～7.30(3泊4日) | 富山電鉄駅発→上市駅(バス)→釈泉寺(徒歩)→馬場島(泊)。早月尾根→剱岳→剱澤小屋(泊)。別山→雄山(霧)→浄土山→室堂→地獄谷→奥大日岳→富高ヒュッテ(泊)。弥陀ヶ原→称名滝→千垣(鉄道) |
| 昭和12年 | 57号(昭13.2.20)「登山スキー部:立山登山」 | 19名 | 坪田、中田、塩谷 | 7.29～8.2(4泊5日) | 千垣→真川発電所小屋(泊)。立山温泉→追分→天狗平小屋(泊)。室堂→立山→別山乗越小屋(泊)。剣岳→別山乗越小屋(泊)。大日岳→称名→千垣→南富山。 |
| 昭和13年 | 58号(昭14.2.25)「日誌」 | 不明 | | 7.25～27(2泊3 | 立山登山、詳細不明 |
| 昭和14年 | 59号(昭14.12.23)「日誌」 | 不明 | | 8.2～8.4(2泊3 | 1班立山、2班薬師岳、詳細不明 |
| 昭和15年 | 60号(昭16.3.1)「日誌」 | 不明 | | 7.26～(不明) | 1班立山、2班薬師・槍・穂高 |
| 昭和15年 | 60号(昭16.3.1)「山岳部:薬師・槍・穂高縦走記」 | 7名 | 坪田、落合 | 7.26～7.31(5泊6日) | 小見駅下車→有峰(泊)。太郎小屋(泊)。薬師岳→黒部五郎→双六小屋(泊)。槍ガ岳→槍・肩の小屋(泊)。南岳・北穂・奥穂・前穂→上高地平(泊)。焼岳下山(バス)→島島(電車)→松本→帰富。 |
| 昭和16年 | 61号(昭17.2.22)「登山:大日・剱縦走記」 | 約20名 | 高田、落合、沓木 | 8.3～8.5(2泊3日) | 称名滝→大日ヒュッテ(泊)。剱澤小屋→剣岳→剱澤小屋(泊)。池ノ平→阿曽原(軌道)→宇奈月→富山 |
| 昭和17年 | 62号(昭18.2.11)「登山班:後立山縦走記」 | 3名 | 落合 | 8.3～8.8(5泊6日) | 南富山駅発(鉄道)→栗巣野駅(徒歩)→立山温泉→五色小屋(泊)。平小屋→針ノ木小屋(泊)。針木岳→冷池小屋(泊)。鹿島槍→唐松小屋(泊)。白馬頂上ホテル(泊)。白馬登頂→祖母谷温泉小屋→小屋平(軌道)→宇奈月→富山 |
| 昭和18年 | 63号(昭19.1.25)「登山班:薬師・立山・剱登拝記」 | 4名 | 高田、増山、島田 | 8.11～8.14(3泊4日) | 南富山駅発→本宮(軌道)→有峰(徒歩)→太郎小屋(泊)。薬師岳→五色小屋(泊)。雄山(霧)→剱澤小屋(泊)。(雨のため剱・早月・馬場島ルート断念)追分→称名小屋→帰富。 |
| 昭和18年 | 63号(昭19.1.25)「夏季修練立山登山3学年」 | 第1隊(約百名)、第2隊(約40名) | 1隊一上西、清水、滝澤、矢後、八十島、荒川<br>2隊一安念、岩田、島田 | 7.26～1隊(2泊3日)<br>2隊(1泊2日) | 第1隊一栗巣野駅(徒歩)→称名滝→室堂(泊)。雄山(快晴)→浄土山→立山温泉(泊)。栗巣野駅(鉄道)<br>第2隊一1日目同じ、2日目雄山→称名滝→栗巣野駅(鉄道) |

凡例：本表は富山高校所蔵の旧制富山中学校校友会誌に記された登山記録と、学校登山に関する新聞記事を、整理し編集したものである。

た。昭和８年には、５泊６日の日程で、称名新道から弥陀ヶ原を経由して雄山・別山を縦走した後、剣岳にも登頂し、その後、池ノ平―坊主小屋―猿飛―鐘釣温泉―宇奈月のルートで下山している。昭和10年には、６泊７日の日程で、立山温泉からザラ峠を越えて針ノ木岳―鹿島槍―白馬岳と縦走したあと、祖母谷―猿飛―宇奈月のルートで下山している。この「後立山連峰踏破」は「県下中等学校に於いて、未だかつて計画された事のなかったものであるが、我が富中山岳部は本暑中休暇を利用して此にそのトップを切って決行したのである」（『55号』）と記されている。

山岳部として独立したといっても、現在の学校部活動のように継続的な活動を行うようになったかは疑わしい。昭和８年の剣岳登山では、長次郎谷の雪渓に差しかかった際に、「途中ガイドにカンジキの穿き方を教わり勇んで長次郎雪渓の麓に着く」（『53号』）有り様で、はじめてカンジキをつけていきなり大雪渓をのぼっており、無謀ともいえる計画であることがわかる。 昭和11年には、浄土山から別山までの縦走という従来からのコースのほかに、馬場島―剣岳―別山―雄山―浄土―奥大日という大縦走を同時に行っている。容難２コースが企画されたが、難コースの参加者はといえば、「時には全く進退極まって、山に無経験の生徒一行に取っては非常に無理と思われるコースで今迄の熱ある勇往邁進の気概も冷めそうになった事もあったけれども、かかる時こそ我等富中健児の意気を示すべきであると思えば、山も何物ぞという負け嫌いな気も起こってきた」（『56号』）という状況で、剣岳登頂を果たした時には、「かかる大難コースを山の初心者が征服するとは？」と半信半疑の有り様である。このように難コースに参加する生徒も初心者であった。容難２コースが企画されるようになったが、生徒の技術力に応じて編成されたというよりも、生徒の体力と希望に合わせて２コースが用意されたといえるのではないだろうか。しかしこのような困難な未知のルートに挑もうとする旺盛なチャレンジ精神には、後の本格的な山岳部活動の萌芽が見いだせる。

昭和14年と15年にも２コースが企画されている。昭和15年には、従来の立山コースのほかに、薬師・槍・穂高方面の縦走を５泊６日で行っている。参加者は教諭２名に生徒７名という少数である。太平洋戦争中の昭和17年には、教諭１名と生徒３名で後立山を５泊６日で縦走している。昭和18年には、雨のため途中で断念されたが、薬師から剱への大縦走が計画されていた。この山行に加わった生徒４人のうち２人は１年生であった。同行山岳部ＯＢである大間知徹三氏は、『富中回顧録』で「山岳部というものが、独立して出来上がったのは、昭和15年頃で、それ以前は、山岳スキー部という名前で山登りもするが、その主目的はスキーにあったようです。」[15]と記している。

これらのことから、一般生徒を対象にした従来型の立山登山が継続して行われる一方、昭和10年代半ばには、少数の登山愛好者を対象にした新ルート開拓型の活動が定着するようになり、実質的に山岳部としての活動が始まったといえよう。しかし、始まったばかりの活動も、戦争の激化によって中止を余儀なくされた。

戦後まもなくの昭和21年４月に、山岳部は他の運動部とともに復活した。翌年の夏山には剱の正面早月尾根から剱沢へと踏破し、中等学校山岳界に“富中山岳部あり”と天下に名を轟かせるなど、その活動にはめざましいものがあった。この伝統は、23年４月の学制改革のあと、富山高等学校山岳部に引き継がれた。そのめざましい活動ぶりは『百年史』に記されている。このめざましい活動も、立山をはじめ北アルプスの山々を間近にし、以前から学校登山などを通じて慣れ親しんできたことによって可能となったものであろう。

また、希望者を対象にして立山登山も復活する。そこでは、戦前とはまた違う楽しい登山が行われた。この部分については、また別の機会にふれることと

したい。

### 1.3　立山登山の変様

大正４年以降、立山登山は継続的に行われたが、その内容は少しずつ変様していった。変様の様子を４つの観点からみてみる。

#### 1.3.1　日程の変様

大正５年の手記には、「草鞋、脚絆の軽装に、身を固め、菅笠に、莫蓙を、打被ぎて、暫時の別を、父母につげ、…鎮守の杜に、登山の安全を祈りて、祖母の見送りを謝し、未ださめやらぬ街の路をば急ぎ…校門をくぐる」（『28号』）とある。服装の点でも、鎮守の森に安全祈願をする点でも、江戸時代の立山登山とほとんど変わらない。ただし、「一同、校庭に集合し、五年生は第一小隊、四年以下は第二小隊に編成せられ、田中、橋本両先生引率の下、平井先生の見送りを謝しつつ、隊伍堂々と、校門を後に出発しぬ」とある。ここには、たんなる遊びではない、鍛錬としての登山という意識が窺える。また、この頃はまだ鉄道がないこともあって、学校から徒歩で出かけていることもわかる。

鉄道を利用する以前は、１日目は芦峅寺まで、２日目は室堂まで、３日目は雄山に登って立山温泉に下るという日程が多い。大正７年には、芦峅寺に泊まった客が多いので、とても室堂に入りきれず、ことによったら野宿になる心配があるということで、翌日は午前１時に出発している。翌８年には、午前２時半に出発しているが、４人雇った中語のうち２人を、室堂での場所確保のためその日の午後11時に出発させている。どちらも８月上旬で、最も良い時期だということもあるが、立山登山の人気ぶりがわかる。

大正10年以降、南富山から立山山麓方面への鉄道が開通すると、１日目で藤橋まで、さらには弘法や追分の小屋まで行くようになり、２日目の行動にも余裕が出てくる。ただし、山頂付近の宿泊場所はまだ室堂しかないため、宿泊の心配をなくすために出発日を７月下旬に変更するようになった。そのため、雨に会うことも多くなった。

また、大正14年からは、称名新道（現在の八郎坂）を利用するようになり、滝の雄大さを間近にして思い出も増えた。昭和６年には、前年に剱御前小屋ができたこともあって、別山から五色ヶ原への縦走ができるようになり、登山ルートが多彩となっていった。

さらに昭和９年以降、千垣から藤橋まで、当時エンジンと呼ばれていた発電工事用軌道が利用できるようになると、１日目に室堂まで行くことも可能となり、２泊３日で立山登山が計画されるようになる[16]。

#### 1.3.2　生徒の登山意識の変様

ところで、交通の発達で楽になったとはいえ、麓から登山することに変わりない。材木坂では、「柱状節理をなした岩石を踏み越え行く中に足は益々重くなり、流れる汗は滝の様。『何故こんな所に来たか』と平生の強者も苦境の此処に至っては、かかる耳にもあてられぬ弱音を吐くこと二度三度ではない」（『34号』）こともあれば、雨が降れば、夏だというのに莫蓙から雨がしみ込んで寒さに震え、足下は草鞋のため滑って転んで泥だらけになりながら登ることになる。称名新道に変わっても、急な登りに大差はない。

登山者が増えていくにもかかわらず山小屋設備は改善されないため、室堂小屋では「８畳に25名寝なければならぬのには閉口」（『35号』）したり、「狭く、煙たく、騒がしく、寒く、今や登山の苦痛はしみじみと味わわれた。ネバ飯に、若芽の味噌汁、これは仙境唯一の御馳走なのか…。寝るに寝られず、外へ出るに出られず、一夜を夢現の中に過ごした。」（『38号』）という状況が続いた。

このような苦しい思いをすることが多かっただけに、雄山に登頂したときの喜びも大きかった。「よ

くこそ我は此処に来た。日頃小胆な我も此の時ばかりは東洋的英雄のような偉大な気分に満たされた」(『29号』) とか、「之で我々は日本アルプス峻険立嶽の征服者となったのだ。雄山の勇者！何と痛快な叫びでないか。家では父母が定めし心配して居られよう。早く親に知らせて上げたい」(『35号』) とか、「越中男子の望みたる立山登高が敢行されたかと思ふと全く壮快得意の念を禁ずる事が出来ない。皆の顔も喜びに輝き、先程の苦悩も今は既に消え失せてしまっている」(『54号』) などの言葉が出てくる。

立山登山の最後は、ほとんど立山温泉に1泊している。疲れ切った体に温泉は最高の贈り物であった。温泉のおかげで疲れもとれ、夜は思い出話で盛り上がった。

生徒たちには達成感だけが残ったわけではない。称名滝や山頂からの眺望の雄大さに感激するだけでなく、雄山頂上社殿では「昔ながらの祝詞及び太鼓は遠く山々に響き渡る。僕らは急に仙人にでもなったような気」(『31号』) がしたり、五色ヶ原では「高山植物が今を盛りに咲き乱れ山中の仙境の思い」(『52号』) がしたり、天狗平では「小屋の前方には入日に対して美しく彩られた波のような雄大荘厳な雲海を見、後方に雄山剱岳の連峯が夕焼けに赤く染められている様は仙境に入ったかの感がある」(『56号』) など、「仙境」という言葉で、山の自然の神秘さ美しさを表現している。

生徒のなかには、立山に登って始めて一人前という伝統的な、いわゆる成人登山の意識で参加した者もいたであろう。富山中学校では、教師や保護者の出迎えがあることもあって、「得意満々として」(『34号』) とか「凱旋将軍将士に比すべき」(『54号』) という表現など、難事業を成し遂げたというううれしさがにじみ出ている。大正5年と大正7年の手記には「立山登山」の赤旗を振りかざしつつ勇ましく帰ってきたとも記されている。また、「後日これが形となってあらわれるものは如何に大きい事であろう」(『32号』) とか、「永久に忘れる事の出来ない深い印象を懐き」(『53号』) など、この登山が最初で最後の大事業であるような記述になっている場合もある。

しかし、そういう生徒ばかりではなかった。大正13年の『文武会報36号』で、陸上運動部の理事の1人である大間知弘次が、「山丘部の芽生」と題して全校生徒に登山を呼びかけている。そのなかには、「山は我等を無条件で抱擁してくれます。私は心の荒んだ時も苦しい時も皆山に向かって打開けます。すると山は私に無言の解答を与えてくれます。…血に燃ゆる九百の健児。秀麗なる山をめのあたり見ながら猶惰眠を貪り続けようとするのか？否！大自然の殿堂に入りて、雲の王座に礼拝しようではありませんか。山々は懐を開いて吾等の来るのを待って居ます。」とある。ここには立山に登って始めて一人前というような勧誘は見られない。ここには登山愛好者の姿がある。登山経験が増えるにつれて、山の多彩な魅力が認識されるようになっていったのであろう。

### 1.3.3　名所に対する意識

手記には名所とされる場所について詳しく記されているが、その記述にも変様が見られる。いまここでは、獅子が鼻、玉殿の岩屋、地獄谷、雄山神社の4つを調べてみる。

まず、獅子が鼻は立山曼荼羅の中央に描かれていることからもわかるように、江戸時代の禅定登山では必ず通らなければならないとされてきた重要な場所であった。富山中学校の立山登山でも、(第2表) の通り、昭和8年までは必ず通過していた。手記には、鎖を使った厳しい登りであったことが印象深く書かれているものが多い。ところが、昭和9年から記述されなくなる。たぶん通らなくなったのであろうと思われる。昭和9年といえば、藤橋まで軌道が利用できるようになって、1日目に室堂まで行けるようになった年である。そのおかげで、登山日程を1日短縮できるようになったが、1日目の登山距離

が長くなり、行動時間も長くなった。そこで時間短縮と疲労の軽減のため、獅子が鼻を通らなくなったのであろう。伝統的な名所も、昭和初期には日程優先のために顧みられなくなったということである。このことは、まだかろうじて残っていた禅定登山の意識が、このころ急速に弱まっていったということをも示しているのではないだろうか。

また、開山伝説で必ず触れられる玉殿の岩屋について記述している手記は、１つもない。たぶん見学に行ってないのであろう。大正期からすでに関心がなかったと思われる。

地獄谷については、必ずと言ってもいいくらい強烈な印象で記されている。怖いと感じる生徒も多くいて、地獄の教えが頭にこびりついている者も多かったことを窺わせる。地獄谷は継続して、登山コースに欠かせない場所であったといえよう。

雄山神社については、（第２表）の通り、時代的に大きな変化なく、「神秘的」とか「神々しい」という言葉がよく使われている。神主による雄山神社の説明にも、日頃腕白な生徒でさえ神妙に耳を傾けたという。しかし、戦争が近づくにつれて、雄山神社に対する意識は変わっていった。

### １.３.４　登山目的の変様

戦争の足音が近づいてくると、立山登山に別の目的が加わることになった。昭和10年の50周年記念号となる『文武会報55号』に、各部の活動状態の略記として、山岳部は「毎年立山登山隊を組織して大自然の偉容に接し天地の偉大さを知らせ、敬神の念を強からしめ神国日本の姿を立山に求めて『立山の御歌』を拝誦させている。」と記してある。『立山の御歌』とは、昭和天皇が大正13年11月に来県した際に詠んだ「たて山の空にそびゆるををしさに　ならへとぞ思ふ御代のすがたも」という歌のことである。この歌は、昭和２年５月、立山三の越の自然石に刻印された。昭和に入って社会状況が悪化するにつれて、軍国主義化が推し進められ天皇への忠誠が叫ばれるようになると、この歌碑は天皇への忠誠を示す格好の場所となった。立山登山をした生徒は、この場所で歌を詠み上げるようになった。また、頂上の雄山神社は、国威宣揚と皇軍兵士の武運長久を祈る場となっていった。

手記に歌碑のことが記されるようになるのは、表２の通り、昭和２年からである。このときは、「三の越で東宮御歌碑を拝し、…」（『42号』）と記されている。昭和５年には、「途中三の越で、東宮殿下御歌の石碑を見る」（『48号』）とだけ記されている。それが、昭和９年には「三の越では東宮殿下御歌碑の前に立つ。…心ひそかに…の御歌を拝誦した。」（『54号』）となり、昭和11年には「三の越で東宮殿下の御歌碑を見て一同立山の歌を拝誦する」（『56号』）となる。

戦況が悪化した昭和18年には、ついに立山登山が強制参加となった。３年生140名が２班に分かれ、第１隊約100名は雄山・浄土・立山温泉の２泊３日コースで、第２隊約40名が１泊２日で雄山登頂のみのコースである。金銭的に苦しい生徒のために第２隊が編成されたとおもわれるが、ここには登山を楽しむという発想は乏しく、まさに修練のための登山となっている。そして、「憧れの国幣小社雄山神社の社前にぬかづき、且東天を拝し聖寿の万歳を絶叫」し、「左に御製を掲げて越中人たるの面目を新たにし、日常修練にいそしみ以て大東亜戦争完遂を誓ふのである」として、立山の歌を書き写して手記が締めくくられている（『63号』）。ただし、昭和19年以降も立山登山が行われたかどうかはわからない。

第２表　富山中学校「校友会誌」の各立山登山記にみられる各所の記述

| 時代 | 掲載文献 | 獅子が鼻 | 雄山神社 | 三の越（歌碑） | 下山時の感想・態度 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正5年 | 28号 | 「一の谷の鉄鎖を攀登せり。其険絶、言ふべからず」 | 「やがて神官は太鼓うちならして、祝詞奏上す。我等一同社前に端座して参拝し、立山の由緒につき、神官の講説を聞く、…」 | | 「立山登山の赤旗をふりかざしつつ、勇ましく帰路につく、…富山中学校登山隊の万歳を三唱し、各自我が家へと別れを告げつ」 |
| 大正7年 | 30号 | 「冷たい水を何杯のんだ事やら鎖に引きずられて獅子が鼻をもすぎた」 | 「古き御堂の前に集まった一同は黙って神官のする様子をみている。太古ながらの高塞、太古ながらの祝詞、そして太鼓、如何にその調和の古雅な事よ。」 | | 「記念の赤旗ひるがえし、かえる」 |
| 大正9年 | 32号 | 「鎖に引きずり上げられて、渓流の間を飛んで行く。滑かな数十尋の岩を這い上がって、獅子が鼻を後に見た」 | 「一同ささやかな御堂の前に集まって、うやうやしく礼拝する。神官は太鼓を打ち、祝詞を唱えた。皆人、共に神秘的な感に打たれて、自ら頭がうなだれるのであった」 | | 「降るなと祈った雨は降った。而して旅の興味は半分を殺がれた。然しその苦痛の中に云い知れぬ妙味があったのだ。後日これが形となってあらはれるものは如何に大きい事であろう、…」 |
| 大正11年 | 34号 | 「鎖に引きづり上げられて渓流の間を伝ひ、危険な残雪の下を潜って獅子が鼻の所に来た」 | 「やがて一同は社前に額づき、神主の祈祷の後神酒を戴いた。神秘的な感に打たれた我々一行は漸時雲を吸い、霧を食い、所謂仙人生活を味うて頂上をば下った。」 | | 「得意満々として横江より汽車にて南富山駅に到着した」 |
| 大正12年 | 35号 | 「一歩踏み外したら最後、一秒後には黄泉の客となってしまふ。」 | 「本社に参拝す。外には嵐の怒号を聞き、内には神主の祝詞を聞き、社前に跪く時、何人も或るインスピレーションに打たれざるを得ない。」 | | 「『よくも彼の高きに登りしもの哉』との感嘆詞を発せずには居られなかった」 |
| 大正13年 | 37号 | 「一の谷の難路も汗を流して無事で越した」 | 「神主の読む祭文の声も場所柄神々しい。方言まじりの説明も神秘に聞いた。」 | | 「（千垣からの）車窓から立山連峰に別れを告げる。校歌を歌う。…富中万歳」 |
| 大正14年 | 38号 | 「一の谷の難路に汗みづくとなり、」 | 「社前に額づき、神主の祈祷後神酒を戴いた」 | | 「今日は家に帰るのだと気づいて何だかうれしい」 |
| 昭和2年 | 42号 | 「鎖に頼って巌石をよじ登り…、木の根につかまり漸く名所獅子が鼻を通って…」 | 「わらじや笠や莫蓙を解いて頂上に登り雄山神社を参拝することが出来た」 | 「三の越で東宮御歌碑を拝し、…」 | 「先生たちに迎えられて四時半頃に南富山駅に着いた」 |
| 昭和4年 | 46号 | 「獅子が鼻へ登って尖端より下瞰すると目もくらむ位凄い」 | 「頂上の祠の神前に礼拝してから四方の眺望を…」 | 記述なし | 「南富山駅には鈴木先生のお迎えを受け、一同万歳を三唱す。皆の顔には満足の色が浮かんでいる。」 |
| 昭和5年 | 48号 | 「鎖にすがり草や岩角にとりつきながら十時獅子が鼻の突端にたどり着く」 | 「御酒を戴き尚神社に関する種々の話を聞いてから名残を惜しんで雄山を下り…」 | 「東宮殿下御歌の石碑を見る」 | 「南富山駅に着いた。鈴木先生や多数父兄方の出迎えを受け、鈴木先生の訓示の後解散、…」 |
| 昭和7年 | 52号 | 「（獅子が鼻で）下の方を見ると目がくらむばかりである」 | 「我富山県人が古来信仰の中心として一生に一度参拝を希望したのは此の社殿で間口二間奥行一間半もあろうか。うやうやしく礼拝の後御神酒を戴く。」 | 記述なし | 「沢山の父兄の方が迎えに来ていられた。四日目に見た富山の町。全く変わっているような気がした。」 |
| 昭和8年 | 53号 | 尖端から下を見ると身の毛もよだつばかりである」 | 「雄山神社に詣で御神酒をいただき神官の滔々とのべる神社の由来を聞く」 | 「三の越で東宮殿下の御歌碑を見る」 | 「富山駅に帰った時先生方や父兄は出迎えに来ておられた。校長先生の訓示後無事に帰ってきたことを喜びつつ且永久に忘れる事の出来ない深い印象を懐き家路をさして帰る」 |
| 昭和9年 | 54号 | 通らず | 「これこそ越中否日本鎮護の神の鎮りいます御社である。海抜一萬尺余峻峰険山を脚下に睥睨して巍然と立ったるその偉容、既に我々をして襟を正さしめるものがある。」 | 「東宮殿下御歌碑の前に立つ。…心ひそかに…御歌を拝誦した」 | 「お出迎えの大村先生の眼には、さぞや我々一行の意気凱旋将士に比すべきもののあった事が、備にうつったに違いなかったであろう」 |
| 昭和11年 | 56号 | 通らず | 「小憩の後雄山神社に詣で神主の滔々とのべる神社の由来を聞く」 | 「東宮殿下の御歌碑を見て一同立山の歌を拝誦する」 | 「石坂先生の訓話を聞き元気旺盛談笑の内に目度く解散する。近日の危険な登山も無事すみ尽くし難い喜びを得、又永久に忘れる事の出来ない深い印象を心に刻んで家路をさして帰った」 |
| 昭和18年 | 63号「夏季修練」 | 通らず | 憧れの国幣小社雄山神社の社前にぬかづき、且東天を拝し聖寿の万歳を絶叫。」 | （山行中の記述はないが、手記を歌で締めくくっている） | 特になし |

凡例：本表は（第１表）の掲載文献から、立山登山のものだけを抜き出して、整理し編集したものである。

## 2　魚津中学校における学校登山

### 2.1　学校登山の開始

魚津中学校は、明治32年、県内で3番目の中学校として開校した。黒部渓谷を始めとする変化に富んだ山域を間近にかかえるという恵まれた環境のおかげで、同校では早くから登山趣味が広まり、校友会誌にも個人的な登山記録がいくつも掲載されている[17]。そういう雰囲気のなかで学校登山も行われるようになる。校友会誌と新聞記事で確認できた魚津中学校の学校登山記録をまとめたものが、（第3表）である。同校における学校登山の開始は、大正10年ごろと思われる。大正10年7月22日の「富山新報」には、県内中学校における夏季休業中の行事として、「魚津中学校立山登山」と書かれているが、この年度の校友会誌で確認することはできなかった。校友会誌では、大正11年以降、ほとんど毎年学校登山が行われていることがわかる。

大正11年度の記録を記した『校友会誌20号』には、旅行記の一つとして「徒歩部夏季登山隊」というタイトルで、「徒歩部にては本年度夏季に於いて、次の通り第1班立山、第2班白馬嶽の各登山隊を編成し、それぞれ活躍を試みた」として、参加者と行程、および2人の手記が載っている。徒歩部の性格については、『校友会誌22号』で徒歩部記事として、春季運動大会の記録に続けて立山登山記録が掲載されていることからしても、徒歩部とは陸上競技部のことだといえよう。陸上競技部のなかに登山活動が加えられていったということと、立山が最初に選ばれたという点では、富山中学校と同じである。なお、この年の登山目的については、立山登山・白馬岳登山とも「心身鍛練」となっている[18]。

この時期に学校登山として立山登山が始まった理由としてまず、大正10年に立山鉄道の滑川駅・五百石駅間が立山駅（岩峅寺）まで延長されたことで、魚津からもアクセスが容易になったことが考えられる。しかしその他に、同校教諭であった吉沢庄作の影響が大きかったと思われる。初期の学校登山の引率者として名を連ねている吉沢は、明治34年から大正15年まで同校で博物科教育を担当するとともに、富山県登山史に残る画期的な山行を数多く成し遂げた人物でもある。吉沢は、それらの紀行文を、日本山岳会機関誌『山岳』などに発表し、黒部渓谷や日本北アルプスを世に広く紹介した[19]。

吉沢は、『校友会誌11号』のなかで、「立山」と題して立山旅行記の一節を寄せている。その前書きで、「古来我中越の青年にして、一度立山に登らざる時は、青年の仲間入りか出来ないと、云われて居たのです。私はいつまでも、此精神を存じて置きたいと、思って居るのである」と記して、成人登山としての立山登山に対する強いこだわりをみせている。また、大正6年、地元新聞で「立山と青年」と題して連載記事を載せ、青年の立山登山を奨励している[20]。そのなかで、吉沢は、立山が中越青年の「精神的・肉体的好鍛錬場」となってきたと述べたうえで、「初めて登山を試みんとする者はまず安全なる登路、途中宿泊所の存在、策源地として人夫の雇入れ、物資の供給の容易なる事、加うるに沿道の景観、山相の雄大、頂上展望の壮観の地を選ぶを要する。この点において立山は最善のものだ。策源地として芦峅寺なり、立山温泉が頃合いの処にあって絶頂までの間には室堂の大建築がある。沿道の各地、至る処ロマンチックな伝説に富んだ奇跡が多い。殊に立山温泉をその近いあたりに有することは登山地としての価値を最も大ならしめている」として、登山初心者にとって立山は最適な山であると説いている。また、精神的疲労をかかえやすくなった現代人にとって、「高山のごとき高層の気象、その引き締まった清新の気分に接する時、平地の沈濁した空気の触接よりする不快な気分から蘇ることができる」として、登山が有効であることを説いている。

このような思想を持つ吉沢は、魚津中学校におけ

第３表　魚津中学校における登山記録一覧

| 時代 | 掲載文献(交友会誌) | 参加生徒 | 引率教諭 | 日程 | 行程 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正10年 | 富山新報7.22 | | | | 立山登山計画、詳細不明 |
| 大正11年 | 20号(大12.3.25)「徒歩部夏季登山隊:立山登山記他」 | 13名、卒3名、他4名 | 谷村、林、稲澤、上野 | 7.25～7.28(3泊4日) | 魚津駅(汽車)→立山駅(徒歩)→藤橋(泊)。材木坂→の谷→室堂(泊)。雄山→地獄谷→松尾峠→立山温泉(泊)。帰郷。 |
| 大正11年 | 20号(大12.3.25)「徒歩部夏季登山隊:白馬嶽登山隊」 | 6名、卒1名、他1名 | 吉沢、山家、寺島 | 7.27～8.1(5泊6日) | 愛本橋集合出発→鐘釣温泉(泊)。祖母谷温泉場→大黒礦山小屋(泊)。雨同泊。雨同泊。唐松岳→白馬岳・白馬館(泊)。白馬山頂→蓮華温泉→糸魚川駅→帰郷。 |
| 大正12年 | 立山・黒部(新報7.31)) | 18名20名 | ? | 7.26～30<br>7.31～8.2 | 立山五色方面、詳細不明<br>鐘釣猿飛方面 |
| 大正13年 | 22号(大14.3.7)「徒歩部記事:立山登山旅行他」 | 36名 | 吉澤、江尻、 | 7.30～8.2(3泊4日) | 藤橋ホテル(泊)。材木坂→一の谷→室堂着(地獄谷見学、泊)。雄山→大汝→五色ヶ原→立山温泉(泊)。千垣(解散) |
| 大正14年 | 白馬(日報7.14) | ? | ? | | 白馬登山募集計画のみ、詳細不明 |
| 大正15年 | 24号(昭2.3.7)「登山部記事:立山登山記事」 | ? | ? | 8.10～8.13(3泊4日) | 魚津駅(電車)→千垣(徒歩)→(滝見新道不通)→藤橋(泊)。滝見新道→室堂(泊)。(雨のため登頂不可)地獄谷→松尾峠→立山温泉(泊)。千垣(解散) |
| 昭和2年 | 25号(昭3.3.5)「登山部記事:毛勝登山」 | ? | 佐々木、 | 7.24～7.27(3泊4日) | 魚津駅(自動車)→平沢(片貝川第2発電所見学、泊)。東又谷→阿部木谷→毛勝谷雪渓(天幕)。毛勝岳→天幕地→阿部木谷小屋(泊)。北又谷→成谷→平沢着。 |
| 昭和2年 | 25号(昭3.3.5)「登山部記事:白馬行」 | 5名、他1名 | 中村、畑、竹内 | 7.31～(4泊5日) | 宇奈月駅発(貨車)→猫又駅(徒歩)→新鐘釣温泉(泊)。清水小屋(泊)。清水平→白馬館小屋(泊)。白馬岳(雨)→蓮華温泉(泊)。平岩→糸魚川→帰郷。 |
| 昭和3年 | 26号(昭4.3.5)「登山スキー部記事:立山登山記」 | ? | 山家、佐々木 | 8.6～8.9(3泊4日) | 千垣(トロッコ)→藤橋→称名小屋(泊)。一ノ谷→室堂(テント泊)。雄山→別山→剣岳→室堂(テント泊)。材木坂→帰宅。 |
| 昭和4年 | 27号(昭5.3.5)「登山部記事:白馬岳登山の記」 | 8名、卒5名 | 能島 | 7.30～8.2(3泊4日) | 泊駅(自動車)→山崎温泉(泊)。前朝日岳(テント泊)。朝日岳→白馬県営小屋(泊)。白馬岳→祖母谷→猫又(エンジン)→宇奈月→帰郷。 |
| 昭和5年 | 28号(昭5.11.20)「登山部記事:剱登攀記他」 | 12名 | 山家、齊藤、寺島 | 7.27～7.30(3泊4日) | 魚津駅(電車)→千垣(徒歩)→称名小屋→弘法小屋(泊)。一ノ谷→地獄谷→剱御前小屋(泊)。(2班6名)剣岳→雄山→浄土山→立山温泉(泊)。帰郷。(1班9名)雄山→五色→温泉(泊)。 |
| 昭和6年 | 29号(年月日不明)「登山部記事:槍、穂高方面登山記」 | 2名、卒1名 | 山家 | 8.3～8.11(8泊9日) | 千垣→水谷工事事務所(泊)。立山温泉→五色小屋付近(野営)。スゴ乗越(野営)。薬師岳→上ノ岳(野営)。双六池(野営)。槍肩小屋(槍ヶ岳往復、泊)。北穂・奥穂・前穂→上高地 |
| 昭和7年 | 30号(昭8.3.1)「登山部:剱嶽登攀記」 | 8名 | 野島、寺島 | 7.26～7.30(四泊五日) | 上市駅(自動車)→釈泉寺(徒歩)→馬場島番人小屋(泊)。立山川遡行→東大谷→別山乗越小屋(泊)。剣岳→長次郎雪渓→池の平小屋(泊)。坊主小屋→鐘釣温泉(泊)。帰宅。 |
| 昭和8年 | 31号(昭9.3.1)「登山部:夏期休暇登山記」 | 2名 | 山家 | 7.24～7.27 | 魚津駅(自動車)→黒谷(徒歩)→片貝谷第2発電所(番人宅泊)。北又谷付近テント泊。(雨)滞留泊。雨のため、下山 |
| 昭和9年 | 32号(昭10.3.1)「黒部探勝」 | 4名、卒1名 | 野島 | 11.3～11.4(1泊2日) | 宇奈月駅(軌道)→跡曳(徒歩)→二見温泉跡→柳又合流点県営水測小屋(泊)。北又川→小川温泉→帰宅。 |
| 昭和9年 | 32号(昭10.3.1)「スキー・登山部:剱登山経過」 | 6名、卒2名 | 山家、野島、中田、中村 | 8.5～8.9(4泊5日) | 千垣(ガソリンカー)→藤橋(徒歩)→称名滝→弘法茶屋(泊)。雄山→別山乗越(泊)。剱岳→長次郎雪渓→池ノ平(泊)。坊主小屋→猿飛→鐘釣(泊)。帰宅 |
| 昭和10年 | 33号(昭11.3.1)「山岳部」 | 4名 | 校長、山家、 | 8.2～ | 宇奈月駅(軌道)→小屋の平(徒歩)→阿曾テント場(泊)。下廊下→ハンノ木小屋(泊)。平ノ小屋→五色小屋(泊)。雄山→剱御前小屋(泊)。雨同泊。剣岳→天狗小屋(泊)。帰宅。 |
| 昭和11年 | 34号(年月日不明)「登山部」 | 23名 | 野島、前田、泊 | 8.2～8.6(4泊5日) | 千垣(軌道)→藤橋(徒歩)→称名→弘法茶屋(泊)。地獄谷→剣御前小屋(泊)。剣岳→剣御前(泊)。(風雨で雄山断念)室堂→松尾峠→立山温泉(泊)。帰宅 |
| 昭和12年 | 35号(昭13.3.5)「登山部:立山登山」 | 7名 | 中村 | 7.30～8.2(3泊4日) | 千垣(自動車)→藤橋(徒歩)→称名坂→天狗平小屋(泊)。雷鳥坂→剱岳→乗越小屋(泊)。別山→雄山→ザラ峠→立山温泉(泊)。帰宅。 |
| 昭和14年 | 37号(昭15.3.4)「山岳部:白馬登山」 | 8名、卒1名 | 柳、寺嶋、宇都宮(魚女) | 7.31～8.2(2泊3日) | 糸魚川(汽車)→小滝(自動車)→平岩(徒歩)→蓮華温泉(泊)。大池→白馬岳→村営小屋(泊)。白馬槍→四谷(タクシー)→小滝(汽車)→糸魚川→魚津着 |
| 昭和14年 | 37号(昭15.3.4)「山岳部:立山登山」 | 4名、他1名 | 平崎、井原、 | 7.31～(3泊4日) | 魚津駅(電車)→栗巣野駅(徒歩)→称名坂→天狗平小屋(泊)。雷鳥沢→別山乗越小屋(泊)。別山→雄山→五色→立山温泉(泊)。帰宅。 |
| 昭和15年 | 38号(昭15.12.20)「山岳部:立山登山記」 | ?、卒2名 | 校長、山家 | 8.6～8.9(3泊4日) | 栗巣野駅(徒歩)→称名滝→天狗小屋(泊)。(悪天候のため剣断念)雄山→浄土山→立山温泉(泊)。雨同泊。帰校 |
| 昭和16年 | 39号(昭17.2.23)「立山登山記」 | 3年生全員 | 前田、山家、三浦、大澤 | 8.3～(2泊3日) | 栗巣野駅(徒歩)→称名滝→天狗小屋(泊)。雄山→地獄谷→松尾峠→立山温泉(泊)。帰宅 |

凡例：本表は魚津高校所蔵の旧制魚津中学校校友会誌に記された登山記録と、学校登山に関する新聞記事を、整理し編集したものである。

る登山活動の開始と発展に大いに寄与したと思われる。魚津中学校では、立山だけでなく白馬岳や毛勝岳・僧ケ岳などへの山行を重ねたが、これはたんに近かったというだけでなく、吉沢の豊富な登山経験が参考になったと思われる。大正13年の立山登山のときには、雄山五の越で「高さ一萬尺雄山の上で／アルプス踊をララ一踊ろう／六根清浄雄山は晴天」と朗らかに唄ったり、生徒たちに、雄山で峰峰やカールを説明したり、五色ヶ原で高山植物について詳しく説明したりする吉沢の姿が記されている（『22号』）。生徒との立山登山を楽しんでいる吉沢の姿が目に浮かぶようである。

## 2.2　学校登山の展開

大正15年の『校友会誌24号』以降、登山記録は登山部記事として紹介されていく。『40年史』によると、大正14年に徒歩部が競技部と登山部に分離し、昭和3年にスキー部を増設して、「山岳・スキー部」と改めたという[21]。大正末期には、登山部として独立して活動するようになったと考えられ、この点では富山中学校よりも早い。また引率教諭をみても、大正期には吉沢教諭、昭和に入ると山家・野島教諭の名前が継続して出ている。彼らは山岳部の顧問として、その発展に大きく寄与したと思われる。彼らの活躍もあって、同校山岳部は多彩な活動を展開し、新ルートの開拓に意欲的に取り組んでいく。

魚津中学校山岳部の特徴の第一は、白馬岳や剱・立山など地元の山の新ルート開拓を精力的に進めたことである。剱岳については、昭和3年にはじめて試みられたが、このときは雲で前方が見えず前剱で下山したといわれている。昭和5年に再度挑戦して成功している。昭和7年には、立山川を遡行して東大谷を経由して剱御前に出て、剣岳登頂を果たしている。昭和8年には、「昭和8年度の登山目的地は片貝谷上流を辿り僧ケ岳、毛勝岳の処女地探勝並び片貝谷上流より毛勝岳に至り立山登山への近路発見が主眼点なのだ」（『31号』）としている。昭和10年には黒部川下廊下を遡行して、平から五色ケ原に出て剱岳まで縦走している。この山行については、「玄人でさえ黒部渓谷縦走は不可能と迄されていたのに我々は第一番に征服するとは、我等の大いに誇りとする所でもあり、魚中登山部として大いに誇ることが出来る」（『33号』）と自讃している。白馬岳については、大正11年のときは祖母谷から唐松岳を経由して登り、昭和2年のときは祖母谷から清水平を経由して登り、昭和4年のときは泊駅から山崎温泉（現小川温泉）を経由して朝日岳・白馬岳のルートを歩いている。

第二の特徴は、北アルプスの難コースにも果敢に挑戦したことである。昭和6年には、少人数ではあるが槍・穂高に挑戦し、「殊に穂高等は中学生にむずかしいと云うにも拘わらずそれ迄の疲れに拘わらず無事に征服したことは我等の大いに誇りとする所である」（『29号』）と記している。

第三の特徴として、夏季以外にも計画が立てられていることである。昭和9年に、11月3日から1泊2日で、教諭1名と生徒ら5名で黒部の黒薙川を遡行している。この計画は、山岳部として年間を通じた活動が行われていたことを窺わせる。

ところで、魚津中学校の場合、校友会誌には実施された登山の一部だけが紹介されている可能性がある。例えば、昭和7年7月16日の富山日報には、魚津中学校の登山計画として「1班－白馬（4泊5日）、2班－立山方面（5泊6日）、3班－白山方面（2泊3日）、4班－後立山方面（6泊7日）、5班－黒部十字峡まで（2泊3日）、6班－キャンプ」と紹介されている。また、昭和9年7月31日の富山日報には、「1班－立山・温泉方面、2班－剱・黒部渓谷方面、3班－白馬・黒部渓谷方面、4班－毛勝・僧ケ岳方面、5班A－後立山・B－後薬師縦走。特別班は4・5年生、卒業生経験者に制限し、希望者募集。」という記事が載っている。他の年にも同様の記事が載っており、魚津中学校ではいくつものコースを用意して、卒業生も含めて参加者を募集して

いたことがわかる。初心者用のコースもあれば、経験者用に難コースも用意されていたといえる。初心者用のコースとして用意されていたのが、立山登山であったようだ。いくつものコースが用意されたために参加者が分散し、１つのコースに参加する人数も少なくなったと考えられる。

富山中学校では、先生たちが出迎えて訓辞を述べ、万歳をすることが多かったが、魚津中学校の手記には、ほとんどそのような記述がない。山好きな先生が多かったこともあって、同好者による活発な登山が行われた結果、立山登山も含めて、登山が今日的な部活動の行事と見なされるようになり、そのぶん学校行事という意識は弱くなっていったのではないだろうか。

太平洋戦争で中断した山岳部の伝統は、戦後まもなくの昭和23年に、新制の魚津高校で山岳部が創設されて受け継がれることになった。創部当初から最も前衛的な登山意識をもっていたといわれ、その活動記録は『百年史』にまとめられている。また、希望者を対象にして立山登山も復活している。

## 2.3　立山登山の変様

大正期は、立山駅または千垣駅まで電車を利用して、１日目は藤橋まで、２日目は室堂まで、３日目は雄山に登って立山温泉に下るという３泊４日の日程になっている。ところが、昭和５年に剱御前小屋ができて、剱岳へのアクセスが短縮されると、剱岳登頂を含む多彩なコースが計画されるようになり、４泊５日の日程も行われるようになる。

立山では宿泊場所の確保が大きな課題であったが、魚津中学校では昭和３年に室堂付近でテント４張張っている。「やがて夕食は運ばれた。丸くなって熱い味噌汁をすする。キャンプライフの楽しさよ！。幾多の登山客は皆ウラメシ想にながめて通る」（『26号』）と手記に記されている。テントを利用することで、日程も自由に組めるようになったと思われる。

雄山山頂での景観に対する感激は富山中学校の生徒と変わらないが、下山時の感想には違いが見られる。たしかに、「一人前の男になることが出来たのだ」（『22号』）とか「おれも男だ立山参りしたぞとよろこんだ」（『38号』）など、成人儀礼としての意識をもっている生徒もいるが、富山中学校と比べると少ない。富山中学校では、教師や保護者の出迎えが成人儀礼の達成を確認し祝福しあう場になっていた。それに対して、魚津中学校では、出迎えがなく、生徒の感想も、「レコードホルダーだと男らしい誇りを持って家に着いた」（『26号』）とか「案内者もなくて、割合難なく又面白く、愉快に山々を征服できた」（『37号』）など、先進的な記録達成に対するうれしさが目立つ。また、「下界は！きたない！暑い！ああ！」（『28号』）のように山への愛着を強く示すような記述や、感想が特になく事実のみを記すような手記は、富山中学校にはみられないものである。

名所に対する感想については、富山中学校の生徒と大差ない（第４表参照）。獅子が鼻については、昭和９年から記述がなくなる。玉殿の岩屋に言及しているものは１つもない。地獄谷については、必ずと言ってもいいくらい強烈な印象で記されている。雄山神社については、「荘厳」とか「神々しい」という言葉がみられる。立山に対する宗教意識には、共通したものがあるといえよう。

魚津中学校においても、太平洋戦争が近づいた昭和16年には、第３学年を２班に分けて各班２泊３日の予定で８月上旬、精神の錬成を目的にして立山登山を行い、雄山神社を参拝している。少なくとも昭和18年までは継続された[22]。

第４表　魚津中学校「校友会誌」の各立山登山記にみられる各所の記述

| 時代 | 掲載文献 | 獅子が鼻 | 雄山神社 | 三の越（歌碑） | 下山時の感想・態度 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正11年 | 20号 | 「大きな鉄の鎖が下がって居る。之に縋って登ると獅子が鼻だ」 | 「流石に立派に且つ荘厳なるものなりき、…御酒を戴き帰途につくまで身の全く塵界にあるを覚えざりき。」 | | 「顧みて峻険降走の苦難を思いては亦自ら一種の感なき能わざるなり」 |
| 大正13年 | 22号 | 「此処で先づ登山者の汚れ切った心を清く且つ高大にするのである」 | 「…さすがに荘厳なものであった。白衣の神主厳かに祈を上げて一同礼拝。御神酒を戴いて神主の説明に傾聴し、…」 | | 「（立山温泉の）湯にひたりながら『己はとうとう登ったのだ。一人前の男となることが出来たのだ』などと無邪気な誇りを感じた」 |
| 昭和3年 | 26号 | 「百獣を威圧する如き勇壮な状態の岩は萬丈の山腹より突出している。…登山の最も険阻は此処だろう」 | しばし神前に跪きし後、馬背の如き尾根伝い… | 「有名な東宮殿下御歌碑が立っている」に続いて、歌を記す。 | 「普通の人なら立山のみで満足すれども吾等は雄山、別山、剱岳をわずか九時間で征服してレコードホルダーだと男らしい誇りを持って家に着いた」 |
| 昭和5年 | 28号 | 「一ノ谷の名所獅子が鼻に至り、鼻に腰を下ろせば、追分方面の展望非常によい」 | 「神主が居合わせなかったので、賽銭を上げて御神酒を戴いた。神楽の音を聞かないのは一寸物足らぬ」 | 「東宮御歌碑の前にて、御歌を二唱した時には霊気に接触したとでも言うか、実に慎厳な気分になった」 | 「下界は！きたない！暑い！ああ！」 |
| 昭和9年 | 32号 | 記述無し | 「頂上の祈祷も神々しく廻りの山々を見渡した時今更乍ら自然の偉大に胸打たれつつここを辞し」 | 記述無し | 特になし |
| 昭和10年 | 33号 | 通らず | 「雄山神社の前に額づきて神楽祈詞の声も厳かに神主のさす御神酒をいただき…」 | 「東宮御歌碑の前にて一寸休んで」 | 玄人でさえ黒部渓谷縦走は不可能と迄されていたのに我々は第一番に征服とは、我等の大いに誇りとする所でもあり、魚中登山部として大いに誇る事が出来る |
| 昭和11年 | 34号 | 記述無し | 天候悪く中止 | 通らず | 「雄山の頂上を極め得ずして下山するのやむなきに到ったのは如何に天候の為とは云え、実に残念な事だ」 |
| 昭和12年 | 35号 | 記述無し | （濃霧のため眺望きかず）「発音の悪い神主の祝詞が終わった。御神酒をいただいたが冷たきこと氷の如しだ」 | 記述無し | 「東久邇宮様の足跡をたどったのである。実に光栄に存ずる次第であります」 |
| 昭和14年 | 37号 | 通らず | 記述無し | 記述無し | 「初めての立山登山であったが、案内者もなくて、割合難なく又面白く、愉快に山々を征服できた」 |
| 昭和15年 | 38号 | 通らず | （濃霧のため眺望きかず）「皇紀二千六百年奉祝と雄山神社昇格の厳典を社前に祝詞するとともに魚中の万歳を高唱した。おおその欲喜云はん術無し」 | 記述無し（濃霧） | 「『おれも男だ立山参りしたぞ』とよろこんだ」 |
| 昭和16年 | 39号 | 記述無し | 「最高の雄山神社にぬかづく」 | （手記の冒頭に歌掲載）「大きな自然石に入江御歌所長の筆になる歌『立山の…』が刻んであったが大分摩擦して見取りにくかった」 | 「我等は遂に多年の宿望であった立山登山を仕遂げたのだ」 |

凡例：本表は（第３表）の掲載文献から、立山登山のものだけを抜き出して、整理し編集したものである。

## 3　砺波中学校

### 3.1　学校登山の開始

砺波中学校は、明治42年、県内４番目の中学校として砺波市に設置された。距離的には立山連峰から遠く離れているが、学校登山としての立山登山の歴史は、魚津中学校よりも古い。『校友会誌３号』によれば、大正６年の８月上旬に、教諭２名が生徒20名と卒業生１名を連れて、立山登山をしている。汽車内で落ち合い、汽車で富山駅まで来て、あとは徒歩である。１日目は芦峅寺に、２日目は室堂に、３日目は立山温泉に泊まっている。旅行記の筆者である松江教諭は、そのなかで昨年も立山登山をしたと書いているが、これが学校登山であったかどうかはわからない。また現在のところ、３号以前の校友会誌も目にすることができていないので、大正６年以前については確かなことが言えない状況である。大正６年以降、校友会誌と新聞で確認できた学校登山記録をまとめたものが、（第５表）である。

砺波中学校における初期の学校登山では、御旅屋太作教諭が引率者として名を連ねている。御旅屋教諭は、魚津中学校の吉沢教諭と同じく、博物学の権威者として知られるとともに、登山愛好者でもあった。大正10年に、吉沢庄作らが越中山岳会を設立した際には12名の幹事の１人にも選ばれている[23]。一方では、御旅屋教諭は博物学者として、登山を自然観察の貴重な機会としてとらえていた。大正12年の立山登山では、初日に千垣へ向かう前に、生徒たちは富山中学と農事試験場に立ち寄っている。弥陀ヶ原では越中平野を見下して御旅屋先生の話を聞いたり、室堂では測候所を訪れてむつかしい話を聞いたりしている。また、生徒たちが雄山神社を参拝しているあいだ、御旅屋教諭が五の越に残っていろいろな実験をしたとして、その結果を紹介し、「水の沸騰点は八十九度。アルコールのは七十度。此処の温度は摂氏十度五分」（『９号』）と記している。手記の最後には、登山の日程を記したあと、「立山臨地講話要項」として、「１．日本アルプスの成因」を始めとして、26項目が記されている。これを見ると、学術研究の比重が大きかったことがわかる。なお、大正11年の登山目的については「心身鍛練及び登山趣味の養成」となっている[24]。

学術研究を重視する姿勢は、その後の登山にも見られる。大正13年の富士登山に際しては、御旅屋教諭が「富士山須走口の植物について」（『９号』）と題して、須走口を選んだ理由として高山植物が豊富であることなどを述べた上で、須走口の植物を詳細に紹介している。また、大正14年には白山登山をしているが、このときにも御旅屋教諭は、「白山登山」という題で、「今夏本校登山隊の通過した道は白峰口旧道を登り、最も難険である尾添口に下ったのである。眺望豁達、高山植物の豊富なのと、植物帯の判然たる白山特色の観察に最良の道を選んだ」としたうえで、白山の植物を詳細に紹介し、種類は少ないが「白山には何でも豊富に生いているので、この点は立山では見られない」とその魅力を記している。

昭和２年の白馬岳登山では、出合龍蔵教諭が「白馬ケ岳に就て」（『12号』）と題して、大雪渓や豊富な高山植物、眺望のすばらしさなどを指摘した上で、「此山は高山の特徴を漏れなく備へている上に、登路も比較的完備しており、且つ頂上の展望も非常に雄大であるから、健脚ならずとも、若人は是非一度杖を曳くべきであろう」と白馬登山を奨励している。昭和３年の富士登山にいたっては、辻伊作教諭が「富士山に就いて」（『13号』）と題して、「俗界に於いて如何なる権威、如何なる金力を以てするも、到底賜ふ能はざるこの大観を味ふが如きは、吾人踏破団が難行苦行の報酬にあらずして何であるか、登山者が有する唯一の特権にあらずして何ぞやと絶叫したいのである」と記している。このように言われて、登りたくない者はいるだろうかと思わせられる。以上の通り、砺波中学校では、伝統的な成人登山とし

第５表　砺波中学校の登山記録一覧

| 時代 | 掲載文献 | 参加生徒 | 引率教諭 | 日程 | 行程 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正6年 | 3号(大7.3.13)「立山登山の記」 | 20名，卒1名 | 稲葉・松江 | 8.6～(3泊4日) | (汽車)→富山駅(徒歩)→芦峅寺(泊)。材木坂→一ノ谷→頃室堂(地獄谷見物、泊)。浄土山→雄山→室堂→松尾峠→立山温泉(泊)。帰校 |
| 大正8年 | 5号(大9.7.15)「立山登山記」 | 8名 | 吉村 | 7.25～(3泊4日) | 出町駅(汽車)→富山駅(徒歩)→芦峅寺(泊)。材木坂→一ノ谷→室堂(泊)。(雨)雄山→地獄谷→松尾峠→立山温泉(泊)。帰校(富山まで徒歩) |
| 大正10年 | 7号(大11.7.15)「立山登山の一節」 | 8名、卒2名 | 御旅屋、宮崎 | 8.5～ | 芦峅寺(泊)。材木坂→弘法小屋→一の谷、その後不明 |
| 大正11年 | 8号(大12.7.15)「立山頂上の大展望」 | 13名，卒5名 | 御旅屋、金戸 | 8.5～8.8(3泊4日) | 出町駅発(汽車)→南富山駅(電車)→横江(徒歩)→藤橋(泊)。材木坂→一ノ谷→室堂(天幕泊)。浄土山→雄山→地獄谷→松尾峠→立山温泉(泊)。横江(電車)→出町着。 |
| 大正12年 | 9号(大13.12.20)「立山登山記」 | 5名、卒3名 | 河合、御旅屋 | 7.28～7.31(3泊4日) | 出町発→南富山→千垣駅(徒歩)→藤橋(泊)。材木坂→一ノ谷→室堂(泊)。浄土山→雄山→地獄谷→桑谷(泊)。南富山駅(解散) |
| 大正13年 | 9号(大13.12.20)「愉快だった富士登山」 | 19名、卒4名 | 金戸、高島、鈴木、御旅屋 | 8.4～8.8(4泊5日) | 出町駅発(車中泊)→米原→御殿場駅→須走村(泊)。須走口八合目石室(泊)。須走→御殿場駅発→東京駅(車中泊)→帰郷。 |
| 大正14年 | 10号(大14.12.20)「白山登山記」 | 14名，卒3名 | 金戸、辻、御旅屋 | 7.28～7.31(3泊4日) | 石動駅発→鶴来駅→白峰(徒歩)→白山温泉(泊)。旧道五倫坂→弥陀ヶ原→室堂(泊)。大汝岳→岩間温泉(泊)。尾添→瀬戸野→鶴来(電車)→出町。 |
| 大正15年 | 11号(大15.12.15)「立山登山記」 | 23名，卒8名 | 厚地、金戸、太田、御旅屋 | 8.4～8.7(3泊4日) | 出町駅(汽車)→千垣(徒歩)→ぶな茶屋(泊)。一ノ谷→室堂(浄土山往復、泊)。雄山→地獄谷(鬼ヶ城崩壊で立山温泉中止)→追分小屋(泊)。称名川→千垣(電車)→帰校 |
| 昭和2年 | 12号(昭2.12.23)「白馬連峯登山の記」 | 4名 | 辻・出合 | 7.28～7.31(3泊4日) | 出町駅(汽車)→糸魚川駅→大所(徒歩)→蓮華温泉(泊)。白馬岳→白馬頂上小屋(朝日岳・鑓往復、泊)。白馬岳→四ツ家→蒲原温泉(泊)。大所→糸魚川駅→帰校 |
| 昭和3年 | 13号(昭3.12.23)「富士登山記」 | ? | 辻、あと不明 | ? | 新宿駅着。東京駅発→御殿場駅→須走→八合目室堂(泊)。富士山頂→お鉢廻り→下山、あと不明 |
| 昭和4年 | 14号(昭5.1.25)「立山登山記」 | 10名，卒3名、 | 森田、辻 | 7.26～7.29(3泊4日) | 出町駅発→千垣駅(徒歩)→材木坂→追分小屋(泊)。雄山→地獄谷→室堂(泊)。雄山→室堂→一の谷→松尾峠→立山温泉(泊)。千垣(電車) |
| 昭和5年 | 15号(昭6.1.15)「立嶽縦走記」 | 10名，卒4名 | 高畠、木下、御旅屋 | 8.3～8.6(3泊4日) | 出町駅発→千垣駅(徒歩)→材木坂→弘法小屋(泊)。一の谷→地獄谷→剱御前小屋(泊)。別山→雄山→五色ヶ原→立山温泉(泊)。千垣(汽車)。 |
| 昭和6年 | 16号(昭7.1.15)「登山部記事・立山登山」 | 9名 | 御旅屋、木下 | 8.2～(3泊4日) | 出町駅発→千垣駅(徒歩)→材木坂→弘法小屋(泊)。一の谷→地獄谷→剱御前小屋(泊)。別山→雄山→浄土→五色→立山温泉(泊)。千垣(電車) |
| 昭和7年 | 17号(昭8.1.8)「登山部記事・立山より黒部へ」 | 約10名 | 高畠、西川 | 8.3～8.8(5泊6日) | 出町駅発→上市駅(バス)→極楽寺(徒歩)→馬場島(泊)。西大谷→大日乗越→室堂小屋(泊)。雄山→剱御前小屋(泊)。別山→平蔵谷→池ノ平小屋(泊)。坊主小屋→鐘釣温泉(泊)。宇奈月(汽車)→帰郷。 |
| 昭和8年 | 18号(昭9.1.13)「白山登山記」 | 6名，卒3名 | 高畠、林 | 8.2～8.7(5泊6日) | 西金沢駅(電車)→白山神社(車・徒歩)→白山温泉(泊)。白山頂上室堂(泊)。御前峯登頂→平瀬(泊)。白川→城山(泊)。萩町→大牧(泊)。帰校 |
| 昭和9年 | 19号(昭10.1.13)「白馬嶽登山記」 | 7名 | 高畠、林 | 8.6～(4泊5日) | 糸魚川駅(バス)→平岩(徒歩)→蓮華温泉(泊)。頂上小屋(泊)。白馬岳→祖母谷温泉→鐘釣温泉(泊)。黒薙(電車)→宇奈月(泊)。帰郷 |
| 昭和10年 | 20号(昭11.2.25)「立山群峯縦走記」 | 10名，他1名 | 林、杉森、小林 | 8.3～8.6(3泊4日) | 千垣駅(エンジン)→藤橋(徒歩)→称名滝→弘法小屋(泊)。一の谷→剱御前小屋(泊)。別山→雄山→浄土山→五色→立山温泉(泊)。千垣(電車)。 |
| 昭和12年 | 22号(昭12.12.25)「白馬・立山縦走記」 | 7名 | 小林、門間、田子 | 7.27～8.1(5泊6日) | 出町駅発→小滝(自動車)→平岩(徒歩)→蓮華温泉(泊)。頂上小屋(泊)。祖母谷温泉(泊)。仙人岳→池ノ平小屋(泊)。剣沢→剱澤小屋(泊)。別山→雄山→称名小屋(自動車)→千垣 |
| 昭和14年 | 24号(昭14.12.25)「立山登山記」 | ? | 中島、木下 | 7.27～30(3泊4日) | 出町駅発(汽車)→粟巣野駅(徒歩)→称名新道→追分小屋(泊)。一ノ谷→地獄谷→別山乗越小屋(泊)。雄山→五色→立山温泉(泊)。粟巣野(電車)→帰宅 |
| 昭和15年 | 25号(昭15.12.28)「白山・永平寺・安宅巡 | 12名 | 木下、増田 | 8.1～8.4(3泊4日) | 福野駅発→白山下(自動車)→一ノ瀬(徒歩)→室堂(泊)。頂上ご来光→一ノ瀬(自動車)→白峰(徒歩)→勝山駅(電車)→永平寺(泊)。福井市内見物→片山津(泊)。安宅関(バス)→ |

凡例：本表は砺波高校所蔵の旧制砺波中学校校友会誌に記された登山記録を、整理し編集したものである。

てだけでなく、学術研究の機会としても登山を奨励していたといえよう。

砺波中学校の場合は、父母や教諭の送迎を記した記事がほとんどない。車中で落ち合ったり、乗換駅で集合している。これは、生徒の自宅が広範囲に分散しているために、一カ所に集まって送迎の儀式ができなかったことも考えられる。一方で、大正11年の登山記には準備するものとして「檜笠（砺波中学校登山隊ト書ス）」（『８号』）と記されている。このような但し書きは、大正11年と大正14年にもみられる。また、雄山山頂で、砺波中学校の万歳をする光景もしばしば記されている。このようなことから、参加者には、学校行事に参加しているという意識と砺波中学校の名誉を担っているという意識が強かったと思われる。

### 3.2　学校登山の展開

富山中学校や魚津中学校と比べると、開始時期はひけを取らないが、登山活動が活発になっていったとは言えないようである。（第５表）を見ると、各山への登山回数は、立山が12回、白山と白馬岳が３回、富士山が２回となっており、これら以外にはない。。『校友会誌16号』から登山部記事として記録されていくが、登山部として独自の発展をしていったようにはみえない。

砺波中学校では、のちのちまで教諭側の主導によって、夏期休暇に登山が計画されたようである。昭和５年の登山記には、「登山者募集の掲示が出た。嗚呼！立山だ！一度は登山したいものだ、と嘗て心に潜んでいた望みを、今年こそ果たしたいものである。」（『15号』）と記されている。翌年の登山記にも、「本年度も例年の如く御旅屋先生及び木下先生が先頭に立たれて、砺中生一行の立山登山が決行された。唯遺憾なことは応募者の例年に比してはなはだ少なかったことだ」（『16号』）と記されている。また、昭和10年の登山記には、「立山登山者募集！控所にこの掲示が出された時、我等どんなに小躍りして喜んだ事であろう。永年の希望を果たす機会が終に到来したのだ。僕はこの登山を痛快に又容易にせんが為、二日間の医王登山と、五日間の能登一周自転車旅行を敢行し、以て健全なる身体を築いたのであった」（『20号』）と、募集が始まってからトレーニングを始めている様子が記されている。

昭和12年には、５泊６日の長期にわたって、白馬岳から立山への大縦走を行っているが、このときの参加者の中には「『大金を費やし、何が故にわざと身を苦しめにこんな所に来たのであろうか、一層のこと海水浴に行ったらもっと楽で面白かろう』と愚痴をこぼすものもあった。」（『22号』）ことからも、登山初心者が混ざっていることがわかる。また、このときには、「校長先生、引率先生より登山道徳並びに仔細なる諸注意を承り…」とも記されており、登山経験者への対応とは考えにくい記述が見られる。

以上のことから、砺波中学校の登山部は独自の発展をしたとは認めにくいが、立山登山はずばぬけて回数が多く、特別に扱われていたことがわかる。

残念ながら、昭和16年以降の記録がないために、その後のことは不明である。砺波中学校でも、戦後まもなく山岳部が創設され、また一般生徒から希望者を募って立山登山も復活した。

### 3.3　立山登山の変様

大正10年までは、富山駅から徒歩で、１日目は芦峅寺に、２日目は室堂に、３日目は立山温泉に宿泊という３泊４日の日程がほとんどである。大正10年以降、鉄道が利用できるようになると、１日目の行程が追分小屋までに延びるが、２日目以降は同じままである。ところが昭和５年以降は、剱御前小屋を利用するようになって、別山から五色ヶ原までの縦走を繰り返すようになる。

砺波中学校の立山登山には、富山中学校や魚津中学校にない特徴が３つある。第１は、往路で利用するコースが、他の２校は称名新道を大正期から利用

しているのに対して、砺波中学校は、昭和６年まで本道の材木坂を利用していることである。昭和10年でも「我等の計画は立山本道より登る筈の所、雨天の為称名新道に変更した」（『20号』）とされ、材木坂への強いこだわりが感じられる。大正12年の手記には、「伝説に名高い禿杉を見逃すはずがない。材木坂の材木石も見た。併し科学上の説明をされてはビールの気の抜けたも同然。」（『９号』）という表現がある。大正15年の手記にも「それも科学的説明を加えれば、安山岩の柱状節理材木石である。」（『11号』）とあったり、昭和４年の手記にも「科学に正せば之れ安山岩の六角柱状節理によりて生じたる現象とか」（『14号』）とあるなど、材木坂で科学的説明がなされていたと思わせる記述がある。その他にも、材木坂では大木の天然林にふれる一方、女人禁制の伝承にふれるなど記述が詳しくなっているものが多い。厳しい登りであったことも関係して、材木坂の印象は強かったようだ。教諭側も、この箇所が立山の学習に好適な場所だという考えがあったのではないだろうか。

第２は、一の谷・獅子が鼻の記述が、他の２校では昭和９年からなくなっているのに対して、（第６表）からもわかるように、砺波中学校では昭和14年までみられ、一の谷・獅子が鼻へのこだわりが感じられる。実は、一の谷について、同校には有名な語り草があった。『校友会誌７号』には、「立山登山の一節」と題して、御旅屋太作教諭が大正10年10月２日の記念修養会で語った、一の谷徒渉の冒険談の一部が掲載されている。「諸君！本日の行啓記念日修養会、今夏、立山登山隊が苦辛惨胆を嘗め、一層印象を深からしめた一の谷激流徒渉の一節を修養の一端として談じて見せましょう。」という冒頭に始まって、「ここ（一の谷）を通過せねば、男子として立山登山したと誇る気になれない名所、雨がふれば、一の谷、二の谷は激流に変じ、とても通れない所である」として、一の谷が立山登山路中最も難険なところであるとともに、立山登山に欠かせない場所であることを力説する。そして、自分が以前に登ったとき大雨のため一の谷を通らなかったためにずっと恥ずかしいような気がしてきた体験から、「天候とはいいながら通過できぬとすれば、隊員に申し訳ない」と思っていたところ、あいにく風雨が強まり途中で引き返す事も出来ない状況になって一の谷徒渉を敢行した。しかし幸いにも、隊員一同が勇敢に沈着に行動したおかげで無事に徒渉を完了することができたという内容であった。昭和５年の手記に「見れば立山路中最大難所、往年御旅屋先生一行遭難の一の谷にして鉄鎖千丈其の険言う可からず」（『14号』）とあることからも、この話は同校の語り草となっていたようだ。一の谷徒渉は同校の立山登山に欠かせないものとなっていたのであろう。

第３は、玉殿の岩屋の記述が、他の２校では全く見られなかったのに対して、表６からもわかるように、砺波中学校では２カ所にみられることである。大正12年のときには、「…山の神主さんに引っ張られていった」とあるが、御旅屋教諭からの依頼があったと思われる。 昭和６年の手記には、剱御前小屋目指して登っているときに玉殿の岩屋が見えたとあるが、関心がなければ印象に残らないはずである。材木坂における女人禁制の記述が多いことなども含め、砺波中学校の立山登山は、かつての禅定登山の面影を色濃く残してもいたといえよう。

以上のことをまとめると、砺波中学校の立山登山は、成人登山という側面とともに自然及び人文分野の学習の機会という側面が強く、スポーツとしての側面が弱かったといえよう。そのため、代表的なコースを一度体験しておけばよいということで、同じようなコースが繰り返し計画されたのであろう。換言すれば、登山は見聞を広めるための一方法であったともいえよう。昭和15年の登山記が「白山・永平寺・安宅巡り」となっているのも、そういう趣旨の一環であろう。

第６表　砺波中学校「校友会誌」の各立山登山記にみられる各所の記述

| 時代 | 校友会誌 | 獅子が鼻 | 玉殿の岩屋 | 雄山神社 | 三の越（歌碑） | 下山時の感想・態度 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 大正6年 | 3号 | 少し油断するとづるづるとばかり滑り落ちるので気が気でない。 | | 美しい小砂利などを敷き詰めていと荘厳なありさまである。 | | |
| 大正8年 | 5号 | その先に立って見下すと心身自らおののく程である | 記述なし | 頂上は狭く、美しい石などが布かれてあった。一度此処より俯瞰せば、急転直下の大絶壁に誰しも心戦かざるはないだろう。 | | ああ楽しかりし四日の旅よ。厳しく立つ立山の勇姿を車窓より眺めて、我等は斉しく淋しい心持ちになるのであった |
| 大正12年 | 9号 | 一の谷から獅子が鼻へと鎖に縋り、岩にしがみついて、天下の絶壁を攀じ、どうにか獅子が鼻の難関を突破して | 伝説に名高い名高い玉殿窟を見物にお山の神主さんに引っ張られていった | 頂上の雄山神社に参拝して御神酒を一杯宛頂戴した。その時分の愉快さ、荘厳さ、将又雄大さ、とても文章家でない私共の述べ尽くさるることでない。 | | 南富山で我が登山隊の解隊式をいと簡単に行って、もろともに帰宅した。僕等はこれであの愉快な立山登山を断念はしない。まだ別山も剱山も残っているから。 |
| 大正15年 | 11号 | 獅子が鼻によじ登れば眼界は再び開け、…人々の心には只歓喜そのものよりは何ものもないのである。 | 記述なし | 参拝をすませて、帰途に就く | 三の越の大自然石には東宮殿下の立山の御歌が刻まれてある。 | 名残は尽きねども足は千垣駅に向かっていた。 |
| 昭和4年 | 14号 | 記述なし | 記述なし | 訳もなく涙がこぼれた…四円より迫る霊気は驚愕すべき大自然の幽玄と相まって身にひしひしと迫る | 記述なし | 秀麗なる立山よ北溟を俯瞰するもの、之に注ぐもの皆白岳と共に永劫なれ！！僕らは心に斯く叫びつつ満山の早緑に別れて電鉄に身を寄せ… |
| 昭和5年 | 15号 | 獅子が鼻を仰げば恰も吼え叫ぶ獅子が萬丈の山腹より西に向かって唸り立っている様だ。又其の鼻端に立って一ノ谷を俯下すれば神自ら戦き、寿命も縮む様な気がする。 | 記述無し | 神霊天手力雄命、伊弉諾尊の大二柱にぬかづく。この懸社雄山神社は…いと荘厳に見受けられた | 東宮殿下御歌碑を拝す。（以下歌記す） | 再び俗界にもどって煩悩を起こすのか等と語りつつ、アルプスの仙境を追慕した。 |
| 昭和6年 | 16号 | 下は急天直下一ノ谷だ。実に天下の奇観だ。 | 剱御前小屋目指して登る。…玉殿の岩屋も見える | 五の越で記念撮影し又雄山神社に参拝した。 | （浄土山で）青訓生一行が東宮殿下の御歌を唱っているのが聞こえてくる。 | 首尾よく立山頂上を征服して来たのだと言う、征服欲を充たした一種の誇らしさを感じた。 |
| 昭和7年 | 17号 | 通らず（大日方面からのため） | 記述無し | 烈風濃霧中に雄山神社に参拝し、五の越に記念撮影をした。 | 記述無し | 私達は、この難コースをよく無事で通り抜ける事の出来た事を限りなく喜ばずには居られなかった。と同時に又、…かの天峻を征服した、その征服の喜に浸らずにいられなかった |
| 昭和10年 | 20号 | 岩の一端に立って一ノ谷を俯瞰する時、心身戦き、身の毛もよだち、寿命の縮む思いがするが、（医王山の）鷲ケ岩のそれよりは、一段と劣っている。 | 記述無し | 神官によって一行の安康が祈願され、ついで神社の神体及び縁起、社殿の歴史、社格の昇進、…長々と語られるを傾聴し、神酒を戴いた。この時ばかりは真に霊峰立山の神霊の尊きを感ぜざるを得なかった。 | 三の越に至りて東宮殿下御歌碑を拝す。…後半は判読できない程である | 終列車で一路、暫しの別れを告げた懐かしの我が家へと邁進した。福光駅にて校長先生のお迎えを受け恐縮の至りであった |
| 昭和14年 | 24号 | 奇妙なる自然美の獅子が鼻に驚嘆して、難路を鉄鎖にて登り、… | 記述無し | 神官の我々一行の雄山巡りを寿ぐ祝詞朗読の声は、折柄の朝風に、白雲去来の中に朗々と流れ、神厳の気体内に漲る。続いて皇軍の武運長久の祝詞奏上、終わりて社前に於いて木下先生の音頭にて天にも響けと砺中の万歳三唱、又遥か四方、大陸に有りて聖戦の第一線に活躍の皇軍将士に対しての万歳を寒気烈々の中に唱ふ。 | 記述無し | 四日間の立山登山もここに全く終わる。家への、友への土産はドシドシ買われる。 |

凡例：本表は（第５表）の掲載文献から、立山登山のものだけを抜き出して、整理し編集したものである。

## 4　高岡中学校

高岡中学校における学校登山については、同校の泉治夫教諭が、校友会誌『古城』の分析を通して、『高岡中学・高岡高校百年史』[25] に詳述している。そのため、本稿では簡単にふれるにとどめたい。同校の登山記録をまとめたものが、（第７表）である。同校における学校登山の開始について、泉教諭は、大正10年７月14日の職員会議録に「告知。職員ニ登山計画アラバ有志生徒ヲ募集シ同行スル様大ニ奨励アリタシ」とあるのと、当時の新聞記事の内容から、この年の白山登山が、同校における学校登山の最初であったかもしれないと記している。同校では、大正10年、陸上競技部に徒歩部が新設されている。徒歩部の行事として、登山が計画されたことが考えられる。登山目的については、大正11年の場合、白馬方面、立山黒部方面とも「心身鍛練」としている[26]。その後、大正13年に富士登山が行われた以外は、立山方面か後立山方面で登山が行われている。

昭和５年には、雄山山頂で、「谷澤先生の発声で『高中万歳』三唱」し、帰りの高岡駅では、「諸先生の御迎えにて皆光栄身に余り、…」帰路についている（『25号』）。また、昭和６年の手記の最後には、「永劫に二度とない此の旅よ。すべて思い出の一くさりであり、今をきらめく天然真珠の一粒よりももっと尊い。それは我々の若き日の魂である。」と記されている。昭和10年の手記にも、「我等四十余名は、多数先生父兄の御見送りをうけて、意気軒昂、立山登山の途に高岡駅を出発」とあり、帰りには千垣で土産を沢山買っている。そして最後には、「この立山登山という美しい思い出の絵巻物、私等、学生時代の愉快な、しかも美しい思い出となるであろう」と感想を記している。これらの立山登山には、学校行事の一環であるという意識と、成人儀礼としての登山であるという意識が出ている。高岡中学校では、毎年行われていたかどうかは確認できないが、頻繁に立山登山が計画され、生徒たちも成人儀礼として参加していたことが窺える。

一方、高岡中学校で山岳部が独立して活動するようになったのは昭和８年からとされている。顧問は砂田英吉教諭であった。複数の登山計画が立てられていることが多いが、一つは山岳部生徒用、他が一般生徒用であったと思われる。そして一般生徒用として、最も多く計画されたのが、立山登山であった。なお、同校山岳部は、昭和14年には、燕岳から槍ヶ岳を縦走して上高地へ下り、さらに焼岳へ登り安房峠を越え平湯へ下るという厳しい大登山を決行するまでになっている。

ところで、高岡中学校の手記には、三の越にふれたものが一つもない。また、昭和18年の立山登山は参加者が40名で、希望制による参加と思われ、富山中学や魚津中学のように強制ではないように思われる。これらのことから、高岡中学校では、立山を天皇制教育に利用しようという姿勢は弱かったといえよう。

## 5　その他

神通中学校は、富山市内の２つ目の中学校として、大正９年に開校した。同校では開校当初から、他校で実施されている１週間程度の修学旅行は行わないこととし、その代わりに校友会に遠足部を設けて、夏期休暇に遠足部として生徒有志を募集して、遠足部の幹事（先生）が引率して旅行に出ることに決定した。その後、登山熱が盛んとなってきたので、景勝の地を選んで旅行することよりも、登山プランを立てて募集することになり、主として立山が選ばれた。３年生以上から募集し、厳格なる医師の診断に

第７表　高岡中学校の登山記録

| 時代 | 掲載文献 | 参加生徒 | 引率教諭 | 日程 | 山中の行程 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大正10年 | 職員会議録、『百年史』 | 不明 | 不明 | 8.15～18（3泊4日） | 野々市→鶴木→桑島（泊）。一ノ瀬温泉（泊）。白山登頂→一ノ瀬温泉（泊）。白峰一越前勝山一福井一高岡 |
| 大正11年 | 職員会議録、『百年史』 | 不明 | 不明 | 7.26～30第1班（白馬方面）、8.6～10第2班（立山黒部方面） | 1班=白馬（糸魚川泊。蓮華温泉泊。白馬山頂一宿泊不明。杓子・鹿島槍一四ツ屋。大町一高岡。）<br>2班=立山黒部（立山温泉泊。室堂泊。別山一剣沢一池ノ平小屋泊。鐘釣温泉泊。愛本一三日市一高岡） |
| 大正13年 | 21号（大正13.12.15）「富士登山記」 | 3名・他1名 | 河合・加藤 | 8.5午後2時発～8.9？ | 高岡駅（車中泊）一大月一吉田口一室堂（泊）。富士山頂一須走、 |
| 大正14年 | 高岡新報（大14.7.8） | | | | 立山登山とのみ |
| 大正15年 | 高岡新報（大15.8.1） | 約20名 | 巣山校長・梅原・大村・山 | 8.1～8.4（3泊4日） | 弘法茶屋（泊）。室堂（泊）。雄山→五色ヶ原→立山温泉（泊）。松尾峠→帰校 |
| 昭和2年 | 『百年史』、写真 | 9名 | 梅原ら3名 | ？ | 不明 |
| 昭和4年 | 富山日報（昭4.7.31） | 28名、卒3名 | 梅原・砂田・大村ら6名 | 7.25～7.29 | 黒部方面→白馬岳→蓮華温泉 |
| 昭和5年 | 25号（昭5.12月）「立山登山記」 | 23名 | 谷澤・上田 | 3泊4日 | 藤橋→称名新道→弘法茶屋（泊）。獅子が鼻→室堂（泊）。雄山→浄土山→五色ヶ原→立山温泉（泊）。帰郷。 |
| 昭和5年 | 『百年史』、写真 | 約30名 | 梅原ら数名 | | 白馬岳登山、ルート不明、写真有り |
| 昭和6年 | 26号（昭6.12月）「立山登山の記」 | 25名 | 梅原ら数名 | 8.1～（3泊4日） | 藤橋→称名滝→弘法小屋（泊）。一の谷→地獄谷→室堂（泊）。雄山→五色→立山温泉（泊）。帰校 |
| 昭和7年 | 27号（昭7．12月）「立山登山」 | 20数名 | 2班梅原、1班不明 | 7月24日～30日（6泊7日） | 剣岳登頂→雄山→五色ヶ原→立山温泉へ、5名は平小屋（泊）。針ノ木峠小屋（泊）。針ノ木雪渓→大出→長野（泊）。高岡へ |
| 昭和8年 | 28号（昭8．12月）「登山日記」 | 7名 | 近藤・砂田 | 7月25日～31日 | 宇奈月（トロッコ）→鐘釣（徒歩）→祖母谷（泊）。唐松小屋（泊）。（暴風雨で同泊）。鹿島槍ヶ岳→冷池小屋（泊）。針の木岳→針ノ木小屋（泊）。平小屋→五色ヶ原→立山温泉（泊）。帰郷 |
| 昭和10年 | 30号（昭10.12月）「立山登山之記」 | 40余名 | 大久保・他不明 | 7月25日～（3泊4日） | 千垣（トロッコ）→藤橋（徒歩）→称名坂→追分小屋（泊）。獅子が鼻→地獄谷→剱御前小屋（泊）。雄山→五色ヶ原または室堂→立山温泉（泊）。藤橋（トロッコ）→千垣。 |
| 昭和11年 | 31号（昭11.12月）「立山登山」 | 約30名、卒3名 | 砂田・徳山・滋田・関根 | 7月26日～29日（3泊4日） | 千垣（トロッコ）→藤橋（徒歩）→称名峡→大日平小屋（泊）。剱御前小屋（泊）。別山→雄山→立山温泉（泊）。帰郷 |
| 昭和12年 | 富山日報（昭12.7.13）『百年史』 | 1班14名、2班7名 | 1班鈴木、2班大久保・滝川 | 7月26日～30日 | 1班は立山へ。2班は立山・剱へ。 |
| 昭和13年 | 33号（昭14.2.28）「山岳部」 | 11名 | 大久保・鈴木・粟田 | 7月24日～28日 | 宇奈月（軽便鉄道）→奥鐘釣（徒歩）→祖母谷温泉（泊）。唐松小屋（泊）。白馬頂上小屋（泊）。白馬岳→蓮華温泉（泊）。小滝→糸魚川→高岡 |
| 昭和14年 | 34号（昭15.2.25）「燕槍縦走記」 | 不明 | 大久保、あと不明 | 7.28～8.2（五泊六日） | 高岡→長野→松本（旅館泊）。一ツ瀬→信濃坂下→中房温泉→燕山荘（泊）。燕岳→槍ヶ岳肩山荘（泊）。槍登頂→（雨で穂高断念）→上高地（泊）。焼岳→安房峠→平湯泊。高山（汽車）→高岡。 |
| 昭和15年 | 35号（昭16.3.3）「弥陀ヶ原から立山頂上へ」他 | 10名未満 | 大久保 | 4泊5日 | 称名坂→追分小屋（泊）。雄山→剱御前小屋（泊）。（悪天候で同泊）。悪天候で剱をあきらめ池ノ平小屋（泊）。鐘釣（軌道）→宇奈月→高岡 |
| 昭和16年 | 『百年史』、36号 | ？ | ？ | | 粟巣野→称名坂→天狗平小屋（泊）。室堂→雄山→剱御前小屋（泊）。剣岳登頂 |
| 昭和17年 | 北日本（昭17.7.4） | | | | 1班は立山へ。2班は剱黒部へ。3班は後立山。 |
| 昭和18年 | 『百年史』 | 40名 | 長沢・岩井・野崎 | 8月7日～（4泊5日） | 称名坂→弘法小屋・追分小屋（泊）。室堂（泊）。雄山→別山→室堂（泊）。松尾峠→立山温泉（泊） |

凡例：本表は高岡高校所蔵の旧制高岡中学校校友会誌に記された登山記録と、学校登山に関する新聞記事と、『高岡中学・高岡高校百年史』（高岡高等学校編）の登山史部分を整理し編集したものである。

より厳選し、毎年20名ほど参加した。体力の弱い生徒或いは低学年の生徒のために黒部渓谷の計画も立てられた[27]。しかし残念ながら、同校の校友会誌には登山記録がほとんど掲載されていないので、詳細は不明である。

数少ない記録の中で注目されるのが、昭和１５年の記録である[28]。２年生約80名が１泊２日で立山登山を行っている。粟巣野駅まで電車で来た後、称名滝を経由して１日目は天狗小屋に宿泊している。２日目は、雄山登頂だけを果たして下山している。一方この年には、前述の記事とは別に、山岳部の記録として３泊４日の立山登山記が記されている。２年生の立山登山は、参加人数といい短い日程といい異例の登山であり、鍛錬を目的としたものと思われる。なお、前年の昭和14年の新聞にも、２年生80名が１泊２日で立山登山を行い、雄山神社で国威宣揚と戦線将士の武運長久を祈ったと記されている[29]。

射水中学校は、昭和２年、新湊市に開校した。昭和13年度の校友会誌まで確認できたが、学校登山については、昭和５年度に立山登山を行ったとする記録がある[30]以外は、記録らしいものは見あたらない。しかし、同校発行の『50年のあゆみ』には、昭和14年以後、３年生が７月末に立山登山をしたと記してある[31]。また同書には、同校第15回生の津浦成允が、昭和18年に行われた３年生の時の立山登山に参加した思い出を寄せている[32]。太平洋戦争前後から立山登山が何回か行われたことはまちがいなかろう。

氷見中学校も昭和２年、氷見市に開校された。しかし学校登山については、昭和11年に立山剱登山を行ったとする記録以外は、現在のところ見あたらない[33]。

## おわりに

本稿では、富山県内の旧制中学校における学校登山の歴史をみてきた。その登山記録の多くが生徒の手によって詳細に記されており、多くのことを私達に教えてくれる。

それぞれの学校によって、特色があることもわかった。富山中学校は、学校登山としては最も古い記録をもち、大正４年以降毎年立山登山が計画され、成人登山の性格を濃厚にもっていた。しかし、しだいに登山愛好者もふえて、昭和８年以降、立山登山のほかに、難しい登山計画も立てられるようになり、昭和15年頃からは、山岳部としての実質的な活動が展開されていった。魚津中学校は、学校登山の開始という点では富山中学校よりも遅いが、山岳部としての独自の活動は早かった。山岳部は多彩な活動を展開したが、初心者用として立山登山も繰り返し計画された。砺波中学校は、学校登山の開始という点では富山中学校に次ぐが、山岳部としての発展は見られない。教師主導による立山中心の登山計画が継続され、成人登山という側面とともに、自然観察も大きな目的となっていた。高岡中学校の学校登山は魚津中学校と同時期に始まり、山岳部としての独自の活動も活発に行われた。富山中学校や魚津中学校のような強制による立山登山は行われなかった。

学校登山のなかで最も多く計画されたのが、立山登山であった。旧制中学校の生徒にとって、立山はあこがれの山であった。参加者は少なかったが、これは費用がかかることと健脚でなければ行けないとされたからだと思われる。手記を読めば、当時の立山登山がいかに大変であったかがよくわかる。交通の便がよくなったとはいえ、麓から徒歩で登ることに変わりなく、山中の宿泊設備も不十分のままであった。それだけに達成したときの喜びは大変なものであった。手記の多くが、これが最初で最後の立山登山であるかのように記されており、その思いがいっそう感慨を深くしたのであろう。

しかし生徒たちは、ただ達成感だけで満足したわけでない。立山山頂からの眺望のすばらしさに感嘆し、原始のままの自然の神秘に心奪われた。この体

験から、山好きな若者が多く生まれていった。当時の青年が未知の自然にあこがれ、果敢に入り込んでいった行動力には目を見張るものがある。

引率教諭たちの貢献も見逃すことはできない。学校登山の多くは、教諭たちによって計画され、生徒に参加を呼びかけて実行されてきた。彼らの登山の目的は、鍛錬や学術研究やスポーツのためなどさまざまだが、彼ら自身が生徒との登山を楽しんでいる様子が伝わってくる。なかには無謀と思われる計画もあったが、冒険心が上回っていたようだ。それにもかかわらず事故が少なかったが、それはガイドのおかげである。山を知りつくしたガイドの果たした役割は大きかったと思われる。また、卒業生からも希望者を募っていることや、旅行先で卒業生の世話を受けることもよく見られるなど、卒業生とのつながりの深さも注目される点であろう。

一方、大正末期から昭和初期にかけて、資本主義の急速な発展を背景に、民主主義思想と社会主義思想が徐々に広まっていった。このような時代の潮流のなかで、国民教化のための道徳教育がいっそう強化されると同時に、その徹底を期すために宗教的情操の涵養の必要が考慮されるようになり、昭和10年に、「宗教的情操ノ涵養ニ関スル留意事項」が文部次官通達としてだされた。「このような宗教的情操の必要性という気運にのって、学校教育のなかに、国家神道的要素を一気に導入し、国家意識と民族意識を強調」することがすすめられた[34]。昭和12年の日華事変勃発によって戦時体制に突入すると、政府は、組織的な国民運動として「国民精神総動員運動」を展開し、神社参拝などをいっそう奨励した。「神社参拝は、尽忠報国の精神涵養という面で重要であったのである。」[35]

そのころ富山県では、富山県知事を名誉会長にすえて、雄山神社の昇格運動が大々的に展開されていた[36]。そのときの論理は、天皇が「立山の御歌」でそのすばらしさを認めているのに、まだ県社のままであるのは納得できないというものであった。その運動の甲斐あって、昭和15年の紀元2600年を記念して、雄山神社が国幣小社に昇格した。このころから雄山神社への参拝が急増するのも当然であろう。県内の多くの中等学校でも、昭和15年に、紀元2600年記念と雄山神社昇格を記念して、立山登山が実施されている。

一方で、昭和14年の「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」発布を契機として、青少年にいっそうの奮起を求める動きが強まっていった。神通中学校や射水中学校で鍛錬として、学年単位で立山登山が行われたのには、このような背景が関係していると思われる。

このように戦時下になると、立山登山が、鍛錬をかねて、県内の代表的な神社として認められた雄山神社の参拝そのものを目的として行われるようになり、それまでの登山とは全く性格の異なるものとなった。立山は、それぞれの時代の教育の要請に応じて、さまざまな利用のされ方をしてきたといえよう。その際、厚生省による厚生運動・健民運動の展開の中で、国立公園が一般国民の心身鍛練の場として利用されたことで、立山への登山者が増えたという指摘も考慮する必要があろう[37]。単に学校だけで立山登山が増えたのではなく、一般的に立山登山への関心が高まっていったという点もふまえて、今後検討を深めていく必要があろう。

かつての立山と現在の立山では、環境も大きく変わっている。かつての青年と立山との関わりは、我々の想像をはるかに超えている。それゆえ、彼らの手記は、富山県民と立山の関わりを考える際の貴重な証言となるであろう。今回取りあげた学校以外にも、多くの学校で立山登山が行われてきたことは、当時の新聞からもわかっているが、調査不十分のため、検討することができなかった。今後も資料発見に努めたいと考えている。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、富山高等学校、魚津高等学校、砺波高等学校、高岡高等学校、新湊高等学校、氷見高等学校および富山県立図書館から、資料の閲覧に便宜を図っていただいた。厚く御礼を申し上げる次第である。

## 註

1）「同志社女子大学学術研究年報18巻」（同志社女子大学刊、1967）所収

2）『高岡中学・高岡高校百年史』（富山県立高岡高等学校編、1999.3月）195頁～205頁、311頁～322頁、723頁～728頁。

3）『白山游記』（「文武会報５号」明治34.5.1）と『東游日録』（「６号」明治35.3.30）がある。

4）例として、『白嶽紀行、五年・三木二猿』（「11号」明治38.6.25）、『大日岳探険並立山夜登山記の一節、五年・立山の一樵夫』（「12号」明治38.11.22）、『立嶽登山の記、五年・柴田美光』（「16号」明治41.5.7）、『立嶽紀行、四年・狩谷好誠』（「19号」明治44.6.20）、『日本アルプスの印象、四年・片口安之輔』（「22号」大正元.9.1）、『立山登山、三年・濱田精一』（「24号」大正3.1.25）などがある。

5）『富中富高百年史』（富山高等学校創校百周年記念事業後援会発行、1985）p494

6）『文武会報28号』p192

7）「北陸タイムス」大正4.7.29

8）「富山日報」大正4.7.25

9）前掲『富中富高百年史』p493～494参照

10）スポーツ史専攻の高津勝一橋大学教授は、『日本近代スポーツ史の底流』（創文企画、１９９４）のなかで、「明治末年から大正半ばに至るまで、学校当局は運動部の対抗競技をしばしば禁止した」「文部省がスポーツにかかわる場合、その基調は『スポーツ制限』『スポーツ干渉』にあったといえる」とし、「スポーツの啓蒙と宣伝に貢献したのは、言論の『自由』を生命とする新聞社であった。スポーツは、教育課程の外部にある学生たちの『自治』的活動に基礎を置き、大日本体育協会や新聞社など、『民間』のイニシアティブのもとで発達した」と指摘している（p297～298）。例えば、野球は明治後期から学校を中心に広まり、大正４年に、朝日新聞社主催・全国中等学校優勝野球大会が始まる。また、高津氏は、スポーツが普及する過程で、近代スポーツの特色である市民的自由や自主性を不問にした「質実剛健」「団体精神」「心身訓練」などの気風が強調されていったとも指摘している。この気風は、当時の登山にも当てはまると思われる。

11）前掲『富中富高百年史』p513

12）前掲『日本近代スポーツ史の底流』、p301～302参照。

13）前掲『富中富高百年史』p480

14）『社会教育に関する調査 第2号』（富山県学務課、大正12.3.30）p309

15）『富中回顧録』（富山県立富山高等学校刊、1950）p340

16）発電工事用軌道は、本来発電所建設用の資材を運搬するためのものであったが、工事上支障のない範囲で登山者の便乗を許していた。正式の旅客用として、富山県営鉄道の千垣―粟巣野間が開通するのは昭和12年である。

17）『校友会誌１号』（明治35.12.20）に「立山登攀日記、４年・長井敬孝」と題する登山記がある。友人４、５人での登山であるが、校友会誌に掲載された登山記としては、富山中学校よりも古い。

18）前掲『社会教育に関する調査 第2号』p310

19）主なものに、「越中方面大蓮華山登攀記録」（『山岳第五年一号』明治43.3.31）、「僧ケ岳登攀記」（『山岳第七年一号』明治45.5.24）、「黒部川方面より剱岳を経て立山に至る記」（『山岳第九年一号』大正3.6.15）、「鑓ケ岳大黒縦走記」（『山岳第九年三号』大正4.3.10）がある。

20）「北陸タイムス」大正６年７月。のちに、『先賢著作シリーズⅠ吉沢庄作著作集』（黒部市立図書

館発行、昭和59.10.20）にも収録されている。

21）『魚津中学校40年史』（魚津中学校刊、昭和15.12.20）p78

22）昭和18年3年生のときに立山登山をしたという卒業生の証言がある。

23）「富山日報」大正10.7.17

24）前掲『社会教育に関する調査第2号』p310

25）前掲『高岡中学・高岡高校百年史』

26）前掲『社会教育に関する調査第2号』p309

27）『オリーブ22号』（神通中学校校友会、昭和9.12.15）137～138頁

28）『オリーブ28号』（神通中学校校友会、昭和16.3.3）61～64、183～185

29）「北陸日々新聞」昭和14.8.21

30）『菊薬』（射水中学校校友会、昭和6.2.15）184頁

31）『50年のあゆみ』（新湊高等学校、昭和51.9.25）80頁

32）前掲『50年のあゆみ』176頁

33）『70年のあゆみ』（氷見高等学校、平成8.9.28）

34）山本信良・今野敏彦共著『大正・昭和教育の天皇制イデオロギーⅠ』（新泉社、1986）268頁

35）前掲『大正・昭和教育の天皇制イデオロギーⅠ』287頁

36）「北陸日々新聞」（昭和11.7.30）北陸日々新聞が中心となって大々的にキャンペーンを展開し、募金活動をすすめた。

37）富山国際大学の藤野豊助教授は、厚生省による厚生運動の展開の中で、国立公園が一般国民の心身鍛練の場として利用されていったことを明らかにし、その影響で1938（昭和13）年以降、立山への登山者が激増していったとしている。単に学校だけで立山登山が増えたのではなく、一般的に立山登山への関心が高まっていったという指摘は重要である。（『ファシズム体制下の立山連峰・黒部渓谷～ファシズム期富山の社会史（1）』「富山国際大学紀要ＶＯＬ９（1999）」所収）（『強制された健康、日本ファシズム下の生命と身体』吉川弘文館、2000年）参照のこと。